

紀伊國名所圖會

後編 四之卷
 在田郡 海部郡

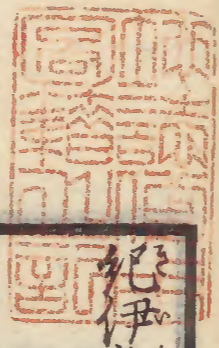
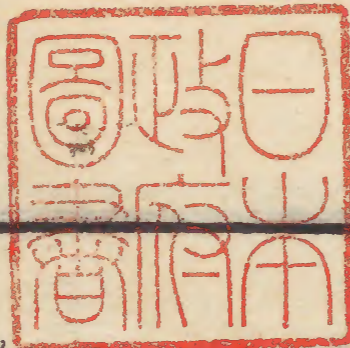
			三六五二	和書門類
	一三二	函	架	
六册				

庫	文	閣	内	
三六五二	和書			
一三二				
架	册	號	類	

内閣文庫	
番號	和 36552
冊數	6 (4)
函號	176 11



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり



紀伊名所圖會後編卷之四

目錄

- 湯濱莊
- 御茶屋跡
- 國主神社
- 明惠真蹟
- 新澤鴻橋
- 湯濱驛
- 湯濱氏故居
- 湯濱醬油
- 白檜左馬尉像
- 本勝寺
- 湯願寺
- 吉川村
- 田村
- 田坂
- 託宣古圖
- 方寸林
- 月見石
- 湯濱系圖
- 玉井橋
- 福藏寺
- 寶林寺
- 揚樂寺
- 逆川
- 枇杷
- 白上碑
- 白神磯
- 頭園神社
- 浪師
- 諏訪神社
- 仙光寺
- 入江松原
- 白方宿所
- 逆川王子
- 森崇基故居
- 絶無畏寺
- 毛無島
- 駟馬圖
- 石崎
- 湯濱氏故居
- 深專寺
- 真樂寺
- 本糸石
- 久米崎王子



湯濱城蹟

廣川

天國劔

天神社

鷹嶋

井関驛

馬留王子

先代八幡宮

海部郡

蓬萊

戸津井

大引浦

靈巖寺跡

廣橋

八幡宮

立神

廣城趾

井関川

津木坂

岩淵社

井関山

衣奈社

小引浦

由良莊

穴地藏

養源寺

男山陶器

能仁寺

幸山幡宮

上草院

觀音堂

鹿背城蹟

由良坂

縁起一箇

白崎

興國寺

廣莊

扁印判

法藏寺

貝化石

井関王子

河瀬王子

藤院

鹿瀬

法華壇

鷺林寺

黒嶋

海瀬

東泉寺
接嶋
宇佐八幡宮

修善寺
妙見宮
柏村
由良湊

莊天神社
長谷寺
沙撈明神
河戸浦

白山權現
御殿跡
小杭
富嶋

湯淺莊

七ヶ村を治ふる甲吉川
西隣の二村を治ふる

吉川村

東麻山北隣の藤木を治ふる
村中を治ふる
吉川中流に
施無畏寺藏

余を治ふる
左隣の村

西平丸ねん押す
山

逆川

源ハ湯浅村界尾下を出て吉川
湯浅二村を治ふる
西小毛石小物小川
西小毛石小物小川
源ハ湯浅村界尾下を出て吉川
湯浅二村を治ふる
西小毛石小物小川
西小毛石小物小川

源ハ湯浅村界尾下を出て吉川
湯浅二村を治ふる
西小毛石小物小川
西小毛石小物小川

源ハ湯浅村界尾下を出て吉川
湯浅二村を治ふる
西小毛石小物小川
西小毛石小物小川

源ハ湯浅村界尾下を出て吉川
湯浅二村を治ふる
西小毛石小物小川
西小毛石小物小川

源ハ湯浅村界尾下を出て吉川
湯浅二村を治ふる
西小毛石小物小川
西小毛石小物小川

逆川王子社

吉川村小川の村の
吉川村小川の村の
吉川村小川の村の
吉川村小川の村の

又凌嶮岨昇イト
又凌嶮岨昇イト
又凌嶮岨昇イト
又凌嶮岨昇イト

又凌嶮岨昇イト
又凌嶮岨昇イト
又凌嶮岨昇イト
又凌嶮岨昇イト

又凌嶮岨昇イト
又凌嶮岨昇イト
又凌嶮岨昇イト
又凌嶮岨昇イト

施無畏寺

重陽衝雨遊施無畏寺
四顧塵煙斷鳥啼
白日閑只聞清梵
響寺在老杉間
石齋青苔秀崖傾
野菊香滿城風雨
日古寺過重陽
上街邦彦



記四圖四

絶無畏寺

白上山下極東村以く巧り去云
宗古或於別梅尾言ふ小寺以

南紀風雅集
明公卓錫 施無畏寺
金猊留偈 積巖陰攢松 畫暗清聲合 倚竹曉寒林 靄深
借問誰能參妙理 山僧典語出壺心

自註云 明惠上人始建寺我鄉白神山寺
記稱上人夢典文殊大士語將別攬猊尾

南く其地横小建寺東々白上此寺其尾下
深谷小色以小致谷とつ小谷何く漢流た小起つて寺と
巖以小く於草庵此巖西小此角小一株此寺以り其下に
繩床一掃を立り庵の傍小白巖果侍りて寺若殿意
せり窟鬼此勢己小殊の像小起り云

當寺の惠上人練ゆせし白上山此林葉小寺當和東九郎
景基此地を卜志て一堂を建立し上人を居清して伏書
此梵筵を菓原浦小庵へ永く遷攝致生此業を林葉小
て伏書此布絶小擬く生類此畏を極こと絶とに云

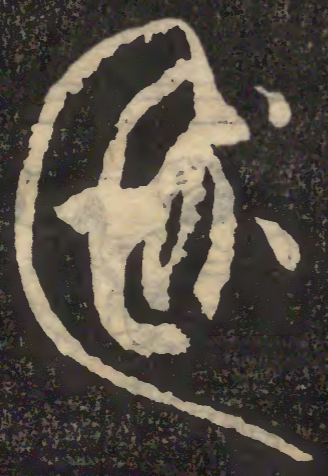
寺と絶無畏寺と号せり上人此滅後小弟子を住彼
親像を安置し寺と号す小三劫華嚴光明法を施入
一藏林房小回一室を寄附せり八所造法記小んんん
今於境内山林涂地小志て本堂冥山寺親堂寶藏法
守書日社建ゆらべ四面楓樹多し又本堂此海小上人
手植せし那本松松る此古本の寺小天保十四年九
月十日未刻山崩して其古本寺傷れりり本坊を堂
舎此下小河りて西南此海小向し毛並前藤の嶋り
と小あもとく寺爲る是嶋りや絶れてとも小はを極
此法系を如く浪の響松此寺りとも上人の心を小
當和此をりけ小小流び目小んんん又小懐意の結
を起せり又藤系景基が寄附状小於中一門四十九頁
草名を書連して上人加おせられ文書及造相乃寶銀

深依中野邑表衣大和
頌才考以事以山以
本寺堂供養有下可也
凡和判刊也
寛永三年十一月十七日中野供養

肥田編四六

湯淺庄奈良原村施無畏寺

沙門高昇

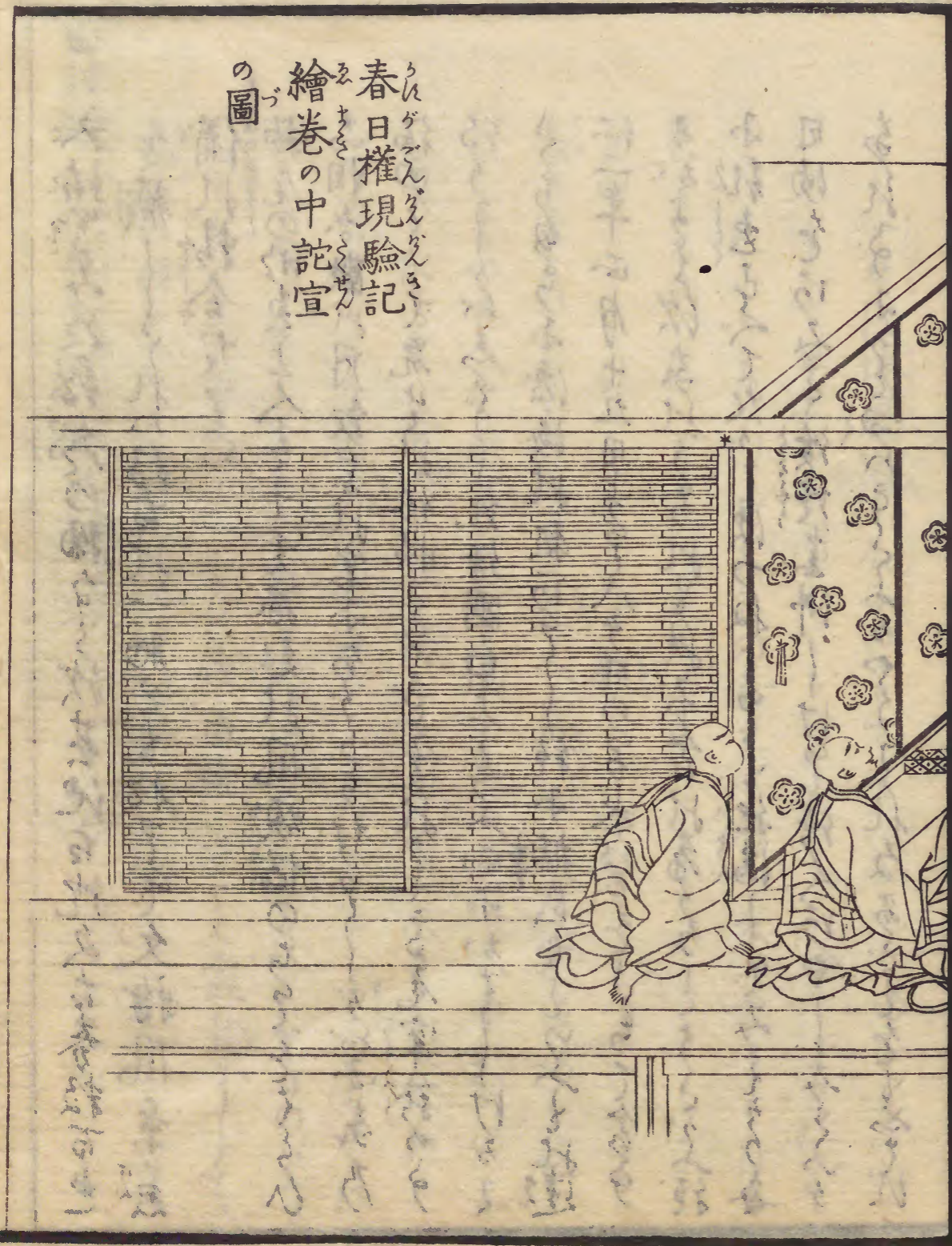


四至

山 隈東

明惠上人真蹟臨寫

春日権現験記
繪卷の中訖宣
の圖



春日権現験記第十七

入治字みねの物より次其他古枕文古券紙百色
を藏ししは好古此一物ともなりて文雅風景
備れ精舎なり
梅尾の明恵上人と十玄孫起此風煩惱のちりきを
六相系獻此月親を此意ふわがりのつらア
福回として気生れ依怙しるべきそれを尾宰第のす
ゆりしる志をい紀伊國白上といふおか
とらぬら小澄海に親らるる程小楠氏女といふも此建
仁二年正月十九日より八ヶ月の留水留をこらて合
母かよふ浪家れらるれも此お合此意なるとうご
小親色とてたがを決つぬよるも紀伊國
日泊をらみく濱姫を併しけり法入らや
あれる小くをいふるやうにるあをいふる

白神磯

今極楽浦といふ白上山の山神海小入
マコ小使をいふて白上波といふ

こ二突れ境界のこみつて世法をふるゆぎといひ
けりて女と日本時りて志をむしるを遠まけり
わのこみちりけり其小のわをいふる
是喜日大の神あり清坊れ多く清坊りてきき
あげりしるはここの制しるは
系りしるは清坊者人小孫とれゆり也清坊を依り
こりしる人をもみる系中續するなり時ハ南都の位
へもきたるせとあべりしるは上人といふけり
六の仰をうり清坊をいふ海をいふ
時うゆりしるをりさせたまは懐妊の人をいふるなり
いさしるをいふるなりしるは清坊感儀もといふ寂然といふ
飛鳩の羽をいふるなりしるは
下文小も日神神堂
のすも板をいふるなり

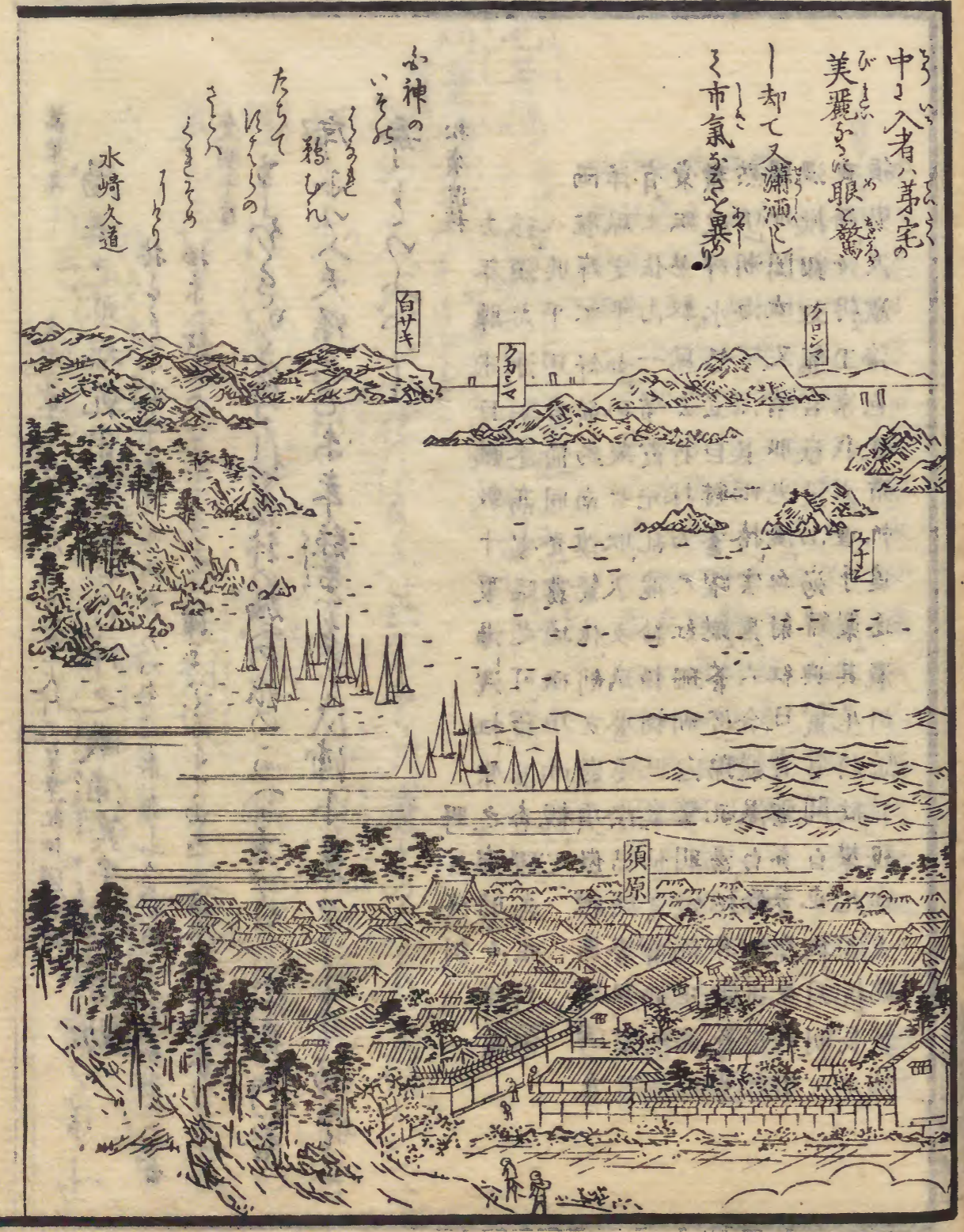
白神儀
眺望の圖

復原々國內豪
富の兼淵はて
皆これ陶朱倚
頭の徒とて
とて所謂江戸
柵持をといひ賣
買貨殖の産業
彼地ふて營々
故ふ一なる此邑



中へ入者ハ弟宅
美麗なる眼と驚
一却て又瀟洒と
く市氣なる異

水崎久道
小神の
いそね
たらけ
移しん
たらけ
いそね
いそね



萬葉集

大正元年辛丑冬十月太上天皇大行天皇幸紀伊國時政

湯羅之耶塩乾雨邪良志白神之磯浦箕乎敢而榜動

按之る右年妻淫泉御幸乃今其系承山の官道より西ありて右

文明十首

右衛門督

序ふつ天保とて来年鯨魚多く浦小来

新とつて

松廬遺稿

去年臘末巨鱈數十聚湯淺拙原之海時々浮鼻
並額游泳逐高處臨之可窺其奔躍兵正月旬
八共不平舒欲約南登霧崎磯而觀之
兩腕痒不舒欲約南登霧崎磯而觀之
有土佐山一嘴霞屹天依紫雲際
裳飄然風去折尺飛紅珊瑚忽驚明鏡而無窮只
黎破碎怒立巨鯨奮躍六合飛瀑白條倒逆散乾
然噴潮海可淵暴雨捲雲黑紅日青電奔發星擘
關坤闔嘘又喻眼光灑血射紅鬣聞白也捉月明
渦掀翻虹龍宮嶽沒山崩鯨與鬣青電奔發星擘
夜跨汝朝王京我亦唾手製其尾將欲攀九宵挽長庚
須史波激海色綠暗帆遙瀛州鵠下視垂天鵬翼端

紀四編四十一

益知方寸宇宙寬振衣長嘯日已落天風颯々蒼髮寒

漢山房詩

乙未正月鯨魚數十來集拙原之海予作鯨魚來
傷其非可來處而來也
鯨魚之志何所施撼山長鬣徒磊砢山人傷之為裁詩
橫海之志何所施撼山長鬣徒磊砢山人傷之為裁詩
鯨魚之志何所施撼山長鬣徒磊砢山人傷之為裁詩
皆連吁嗟鱗介之族何茶毒短鋌長鏞尾汝窺獨有南
溟堪窟宅一帶象山翠如圍好潛此間莫輕出待我騎
汝朝紫微

毛無鴉

新鷹傳

昔也上人の鴉小抱ひまふ其名を新鷹とつて月小傳ひて

輝一松風響を要巖此指小傳ふ之情の渾父約客抱鏡の
真を借さ次とつとも懸縁對境一々其心を細めざる
る一建久未此頃紀別小下向次湯淺の海中小二傳りり
南小相益ひて其る三巴丁をかり以鴉を東細長く南小



詩聖堂詩集
 川藻島前潮欲廻
 洞門波濺響喧歷
 送將莽々炎曠去
 迎得娟々素月來
 詩佛老人

天か橋

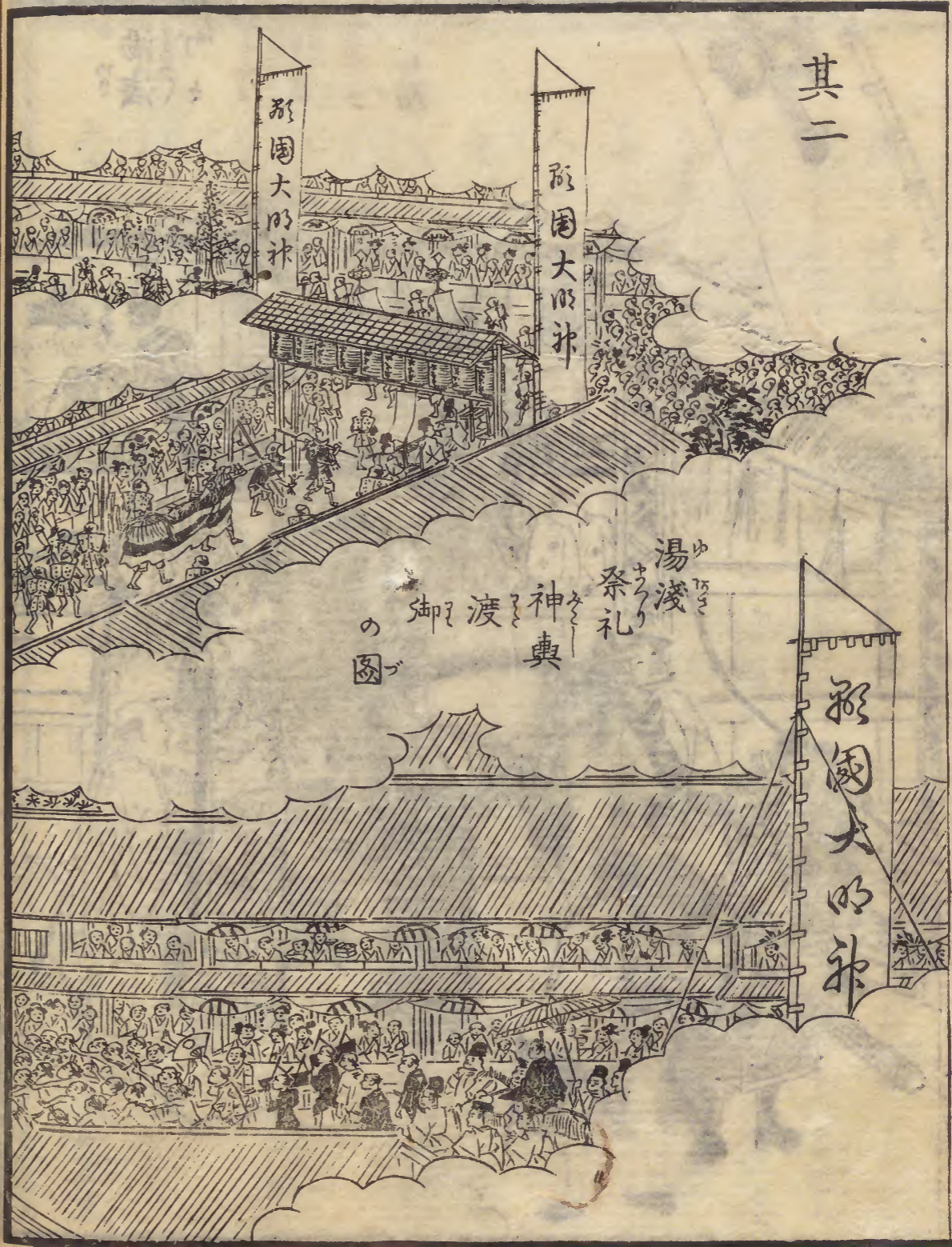


荊磨島
 岩穴東西へ
 貫るるるる





候一陸地より一里許を過て海中小待り又南二十丁
 許を去りて豊鴻久渡急行り南角小島ありて是
 巴國此島を以る西方を海味大虚と連りて西天の境
 ありしが急暴の思を色むる小使あり上人と道忠傳都
 并小喜海と二人相苦小島の徳小渡りおれる船とゆりて
 六日後来るるさより均東次南所應傳の南端の島
 面の洞小橋小敷板の板を以て懸て橋小築尾小撤と西
 日向ひて釋迦像一鋪を懸けたるかの御前小於て續經
 金桶六日此島の食るるの物一貝水一桶砲一筒あり
 ○方寸派 吉川村より湯浅村小知る友乃小有り板乃廿一丁里老の傳小は板乃
 古名を御を板とつゝといひて是れども都者野小も又も次がやつり
 又云古は山の本此林を滅るを是野乃といひ湯浅村守
 宗主よりいし山に居候一板乃本村より移れり
 願國神社 湯浅村の長田中子有り衣中巴國村の
 願國神社
 當社をいつれ世より田村小坐次國津神を勧請せし小寛文





同様に
法に
おの
る



其三



年中 官命小よるとて顯國神と稱号し一李梅溪と
 て多居れ顔をか勢と多り志とありしよりこれと社
 殿を造りし後をいへり 井ととを尾
 ○湯浅驛 文系駅より一里あり小川の町を乃
町内より入其北市街の名を吟い
 湯浅の驛に其野邊の咽喉子居り市鄧旅舎軒と連ね渡
 来常小橋渡りし海邊と遠近の音拍風不送り出入蟹戸
 此溪艇を船多々呼喚して更なる勢なり一実小海陸橋接
 の地とありて古湯浅氏此地小居り一頃甲冑れ食之りり
 て其名四方小勢なりしより古書小見えしより勢あり
 此村流中をゆら流へし人々天正年中海淡小石垣を築き
 入江の松系を并りしより以来高麗市街とありて子戸
 にかよひ寛永十二年更小石と多りみく海小築出り新
 地と築きしより戸敷と小橋一遂小郡中れ旅舎

とらるれり建保建仁の頃和歌の御會ありしに
 元文元年小湫集會を修せし一宗景入道が石倚の版に
 と市街乃勢小埋没しし今これを記す小由あり

明月記

寛喜二年正月十六日己酉今日人々物語云少將頼氏朝臣
 参熊野於湯和左宿与其侍後見左衛門尉合枕卧之間燈消
 眠覺忽聞奇音驚起秉燭見之件男顔加手被斬唱念佛二聲
 即死少將雖悲歎猶遂参詣云甚不可然事歎昨今已下向云
 聞事躰只共人之中所為歎

月見石

湯浅飯治屋町茶州の人家の裏小川の建保四年八月 辰吉初上を懸せし昔
 の附以地の海淡小湫ありし石小湫をうけしを多し日を焚し多しと
 或人いへり又小町の裏小井ありし幸の
 附以多を依りせし中つひはく

建保四年八月廿日五首御熊野詣
 後鳥羽院御集路次當坐和歌湯浅宿

勢り神のみめれ山橋さるを風の多向もあふ
 かこ山の村のやうく火氣くつまらん火の夕月板るる

秋のつる雲子先泳むらんを望よといつた月うき
 をとつせや峰の本枯れぬ吹はもそれ書け山の端
 ひろくく旅のし神もわらわら山のふれ雲月のこゑ

明日香井集

建保元年 八月廿日
 建保元年八月廿日

日影さび雲れくくその糸麻ささるれお小風そ涼し
 孫白や山のまがきて秋風の吹上れ浪小ははふ日秋
 雲のまらぬおの衣さふくさひてさびみられ山風

湯淺

湯淺氏の二門流なり一はより湯淺なる
 異制庭訓往来云

豈中 鑷形劔首竹角等一向違古躰宗當世掾召寄紀伊國湯淺乃至

太平記西院本 上上山門臨幸條 洛陽邊聞候物具細工共自核調至為立隨分認手碎心所結構也

湯淺莊司進出テ申ケルハ畧威毛コソ好モ候ハ子共我等が

肥田編四十八

手ツカラタメ持テ候物具ヲバ如何ナル筑紫八郎殿モ左
 右ナク裏カ、スル程ノ事ハヨモ候ハジ云云と云えられ湯淺

石崎

石崎を湯侍の古名といひ湯浅中れ字なれ
 一本明徳傳云

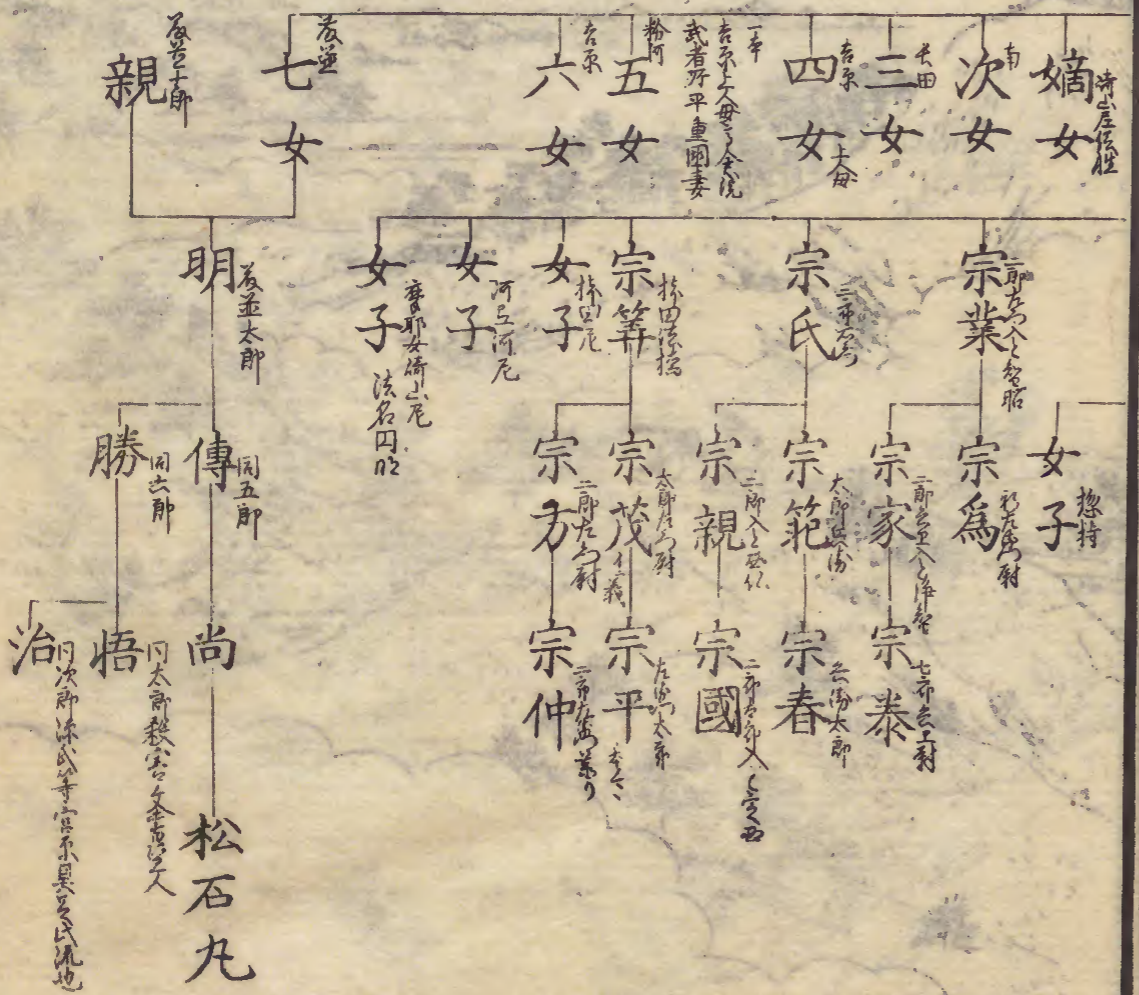
元久元年二月十五日於紀州湯淺石崎親類宗景 修涅槃會

湯淺氏故居

湯淺村湯治を町の小湯湯故
 を教と云ふ云なりこれゆへ

湯淺氏ハ孫宗とて次法重氏の内侍とて知られりて次世に
 地小居し武勇とて下持せられ孫宗元を孫宗元とて人始て
 書小見つるといへも其後平治の事持守を孫宗元とて天下に
 を以其裔とて孫宗元とて孫宗元とて孫宗元とて孫宗元とて
 る實今此之孫宗元一族の連署小六十人許の姓名を載せしめて
 一門系於八條付園とて孫宗元とて孫宗元とて孫宗元とて孫宗元とて
 孫宗元とて孫宗元とて孫宗元とて孫宗元とて孫宗元とて孫宗元とて
 孫宗元とて孫宗元とて孫宗元とて孫宗元とて孫宗元とて孫宗元とて

名可なりそれより次子孫法ふふ分及一今於湯濱と成
 一或を清山を以て成とされれば皆一族なりとつ二門の
 姓名雜史古文書等子不見多一といふも故元を承けて
 一二をあげて後を此清山系が家小傳ふる古系圖と源次



水崎入道
 九子
 八重孫
 七子
 六子
 五子
 四子
 三子
 二子
 一子



湯治宗永
 八重孫
 七子
 六子
 五子
 四子
 三子
 二子
 一子



粉河寺縁起云

孫永宗永移裁花木子孫繁昌事

宗永ハ紀伊國在田粉湯濱の位人なり武勇れ家子生れ持権を以て
次孫もとも當ち子輝依の心なりと云和元年此妻の頃持権とかり
捕がごとし山中小入る殊傍の八市橋を又出せり位宅小移一裁と
重孫の取違はるごとしと云と云孫孫山う天正より粉河より彼是也
の事小多中子房重海の衣をこれ僧来云かの事ハ家小可路なり且
路かこ本命と違はるごとしと云多中子房重海が申する事云然止せし
れごとしや宗永多中子房重海ハ此辨の人小違はるごとしと云云
人小漸坐なりや僧云家ハ粉河と云小右位とあり此宗と違はるごとし
田邊の方と違はるごとし也と披ふと子孫の末まで獲る人一考を以て後
多しと云本とわりて當る小違はるごとしと云但約路の方角を立却して
使去小不告就て其由を承ける小先と云て件の方小強りするの
符合位を増し宗永ハ出家して記西に名けて一坊を為小志て九千
と云て死ねる子孫のりて今小繁昌せり 此孫起天海は子のうすをいれ
バ今と云るは子のうすをいれ
平治物語平治元年十二月平治盛延野結逢中洛中此意と云て於へ
久し條云去る節小十日此曉と波屋と云と云と云と切目の右ありと
退付たり畧は此意と云と下向以畧然此意と云と云と云と云と云と
小史を立見へば二十騎ある湯濱持守宗永二十騎と云と云と云と云と

このれ是百騎小入小多中

平家物語平治二年八月山門と日合戦の條云大政入る院宣を承り紀伊小
位人湯濱持守宗永以下畿内のを者二千餘騎大元と云と云と云と
堂元を攻められ畧源平重兼紀の文同一と云と云と云と云と云と
同時の事と書し云湯濱持守宗永と云と云と云と云と云と云と云と
うと世七騎ぞるると其時と云と云と云と云と云と云と云と云と云と
平家物語云宗永ハ畧丹波持守忠房ハ八幡の軍より落くとも云と云と
おとせしが紀伊小位人湯濱持守宗永と云と云と云と云と云と云と云と
也と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と
のめと云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と
一と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と
又ハと云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と
その入るごとしと云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と
まうと云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と
也と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と
と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と

平家物語云

元暦元年二月四日

在御判 頼朝

退申すも云らされ入る事申せしと云と云と云と云と云と云と云と云と

平家捕河赤永二年三月惟盛卿... 湯淺守宗亦... 湯淺七希去湯宗先... 湯淺七希去湯宗先とつてはれ也 令文日高郡

明惠傳記曰建久九年畧石垣山奥人里三十町許隔テテ... 立十云處了リ奥アノ靈地十リ上人ノ舅湯淺兵衛尉宗光... 同書曰石垣ノ地頭職違乱ノ事出来シカバ保田ノ星尾十云

東鑑云兼元四年二月十日紀伊國安豆川在地頭職者故右... 大將軍御時為高野大塔造營奉行賞賜高雄文學房訖御素... 意被改彼一身之處此間湯淺兵衛尉宗光稱得上人讓狀望

上覺 一幸の哀情記不上見え上人を助成の叙父とつて今系系を接する子以入る
急策抄法雲慈尊達中より引く人候不き宗重が子の十二るが宗重華
の上下の文是より一具の上覺とつていひしや

孫去入道念佛 志平記云元弘二年三月八日畧捕去湯正八去子未返の涙
ろくろが家上分其於湯淺孫去入及念佛 孫去入念佛 在地改小未返...
多し今ハ河内小不於孫去入念佛 孫去入念佛 と心安くあひる 孫去入念佛 孫去入念佛...
六百餘騎を率して孫去入念佛 孫去入念佛 押寄て息をもつかぬ攻戦入孫去入念佛...
まゝにりりりや湯淺より孫去入念佛 孫去入念佛 阿波河より人又去百人小去孫去入念佛

記四冊四九二

叔中不働人んとする由捕爪小少て兵を乃の切あへさるる... 孫去入念佛 志平記云元弘二年三月八日畧捕去湯正八去子未返の涙
ろくろが家上分其於湯淺孫去入及念佛 孫去入念佛 在地改小未返...
多し今ハ河内小不於孫去入念佛 孫去入念佛 と心安くあひる 孫去入念佛 孫去入念佛...
六百餘騎を率して孫去入念佛 孫去入念佛 押寄て息をもつかぬ攻戦入孫去入念佛...
まゝにりりりや湯淺より孫去入念佛 孫去入念佛 阿波河より人又去百人小去孫去入念佛

幸宮太郎左馬 或八郎

志平記貞和八年三月八日畧捕死孫去入念佛 志平記云元弘二年三月八日畧捕去湯正八去子未返の涙
孫去入念佛 志平記云元弘二年三月八日畧捕去湯正八去子未返の涙 在地改小未返...
多し今ハ河内小不於孫去入念佛 孫去入念佛 と心安くあひる 孫去入念佛 孫去入念佛...
六百餘騎を率して孫去入念佛 孫去入念佛 押寄て息をもつかぬ攻戦入孫去入念佛...
まゝにりりりや湯淺より孫去入念佛 孫去入念佛 阿波河より人又去百人小去孫去入念佛

湯淺左司

志平記小又... 湯淺左司 志平記云元弘二年三月八日畧捕去湯正八去子未返の涙
孫去入念佛 志平記云元弘二年三月八日畧捕去湯正八去子未返の涙 在地改小未返...
多し今ハ河内小不於孫去入念佛 孫去入念佛 と心安くあひる 孫去入念佛 孫去入念佛...
六百餘騎を率して孫去入念佛 孫去入念佛 押寄て息をもつかぬ攻戦入孫去入念佛...
まゝにりりりや湯淺より孫去入念佛 孫去入念佛 阿波河より人又去百人小去孫去入念佛

湯淺大郎放居

御幸記云 廿三日天晴畧午刻許入湯淺宿野五郎云男宿所事甚過差... 予之不堪感引死殘鹿毛馬了今日適休息終日偃卧

五月
定家
湯
小舟
引
物



湯液醬油

玉井醬

諏訪神社

村中不て紫礮次尚不才一此名成小一てき味極て美るる湯華をく
湯液醬油 湯液志不乃町の堀人森の末州を南へうけて松東河を流執されサ
玉井醬 村中大板屋三を承不て紫次經山寺味香の類白り或ハハハ經山寺味香ハ云承寺の
諏訪神社 湯液志不乃町の堀人森の末州を南へうけて松東河を流執されサ

社傳小じり御射山小河を後世以地ふつと
つは神顯國神社よと古き鐵壁なれハ湯液在申此産
土神と云ふ又云じり此神地ハ壇を築きて巴隅小板の
を建て社々々々々小元源九子てめて社殿を造り
と云ふ

玉光山深専寺

同小町小河
寺宗西山孤り

當寺ハ寶徳年中明秀上人の弟創りて願ふハ白檀を
耐法名秀月宗悦居士有り今白檀の徳と花む付物教品
何

龍頭山福藏寺

同小町小河
西派末寺二十八人寺有り

當寺縁起小云伝別賣代の僧人平林三友とつと者而縁何
て當那宗系御小移住也其子末文昭子百蓮上人乃
中子と云ふ 宮東小一寺を建立次世の縁業
此時永源寺中湯河並其海部那家宗浦小て寺地免
許一寺を建立せしめ法政を免許次天正寺中島村
小遷し時頃令在遷の家次よと法政を免許次文を以
ト整用おらる

仙光寺

湯液志不乃町
同小町小河

真樂寺

湯液志不乃町
同小町小河

幸徳寺

湯液志不乃町
同小町小河

寶林寺

湯液志不乃町
同小町小河

入江松原

湯液志不乃町の堀人森の末州を南へうけて松東河を流執されサ
系との入江松原云入江川松原のゆるゆる流するを此松原ハ云承寺の
兼園之係某園の哥ありと云ふ今乃雲系を云承寺中久世利道と云ふ
去れ極



海満院香雲并涅槃
 坂内霞峰
 不寒深専寺畔人如
 乾柿外輕風吹
 薰篝火老麝煙
 深専寺

湯浅
 旅舎
 深専寺
 観音堂
 利生軒



有陽軒
 鐘樓
 阿木六
 鐘樓

白橙九衛門肖像

孝宗悦

悦目連

花うらよこ院

心法水長

副表非

則度已

天○深冲精

西岳道

慶長武藝場身中二

治東禅林位果



御幸記

十月九日 畧次又過今日御宿三四町許入小宅宿所自
上雖有例假屋此家主依儲雜事入此所女儀ガ智先是
又依文義從男取宿所先入小宅之間件宅有憚之由聞
付之仍騷出入此所先達如此事不憚之由雖然臨時水
ヲカキテ以景義令殺了又依有所思取潮垢離力ク是
臨時之事也此湯淺入江邊松原之勝形奇特也家長送
題二首詠吟窮屈之間甚無術兼燭以後又著立為帽子
如一夜參上小時被召入部内又依仰講師事了即退出

享保七年九月十一日湯淺村の宿を尋ねて九月十二日
入江の松原に於て假屋大なるを尋ねて十二日つとめては
を出入せしむるに依りて此の宿に於ては
を出入せしむるに依りて此の宿に於ては

又つれ秋と焚らむ入江川のほとり此家のさらさらの
又つれ秋と焚らむ入江川のほとり此家のさらさらの

右二首のころをとりて之

類聚一當ちも又兼取以手後修七宗此僧再更せり中事業抄
古に白り付拍八担大浦の條八幅たり其の西一町許小大つとる字此地有り
白方宿所 今宿るは以掃糸されしより小北の地なり一町文との意
上人内崎山小左一此方れば皆く不載て後考をせり
一本明惠傳記

兼元四年四月民部卿長房卿熊野詣下向之時於白方
宿所上人對面之次花嚴金師子章注釋重有懇望之趣

久米濟王子社

別本村の南古より一町許東小北の地嘉復修造の後又
社破壞して築地のこりなり小官命なりて小祠あり

十日自夜雨降遲明休朝陽漸晴晝天猶陰拂曉凌雨赴
道無程王子御坐云但依路遠向路頭樹拜云云云

然聖道王子社等破壞事依法有願可被修造也日時勘文是
之其内紀伊國湯浅莊久米崎王子社破壞云云然者為地領之
便如孝丁寧可被造營之狀依仰執達如件

嘉復二年七月廿四日

湯浅本郎殿

武藏守宗
修理權左衛門

湯浅城蹟 同村の東山に小いや庭並現是村小南に
湯浅權守宗系より不詳を築く

花宮三代記云

永和元年九月廿五日紀伊國所楯籠之宮方没落之間翌日
守護人已下攻入在田郡湯浅之間所々宮方城没落云 十

一月五日夜紀伊國大將細川兵部大輔使者到来去二日凶
徒打取之間合戰大將引籠移云

殘櫻記云

文安元年八月義有王
三ノ條菅原島山持圍入道紀伊の圍人等小

下知して八幡城を攻させり其る小寺を利を失ひ
南方隈小寺より攻めけり其を細川出羽を差向

て破り攻めれを城をとも防ぎて其城を棄てけり
同小湯浅城を攻めて籠りて居りて其城を同三年

九月島山かの是が衆人抱依を存介ありて守勢入及
彈網を差きしを攻めれども城を破りて其城を

切く出さるれば其大寺討死され守勢於其粉河も小楯
籠りぬ



靈巖寺
古跡

山門を
つひねりて
夜をた
一炉菴
風香

廢靈巖寺跡 名傳村を去る所一里餘の山中にありて北に古の穴跡と

人の書多し人傳

穴地藏 山田より北に數里ありて北に古の穴跡と

廣莊 山田より北に數里ありて北に古の穴跡と

廣川 二村の間を流るる川なり

廣橋 廣川より北に數里ありて北に古の穴跡と

長立山廣源寺 廣村の北端にありて法華宗より當り當り大正天皇大藏所

年傳以て紀後子の史記に於ては長立山にありて法華宗より當り當り大正天皇大藏所
 もれりて一かふりありて法華宗より當り當り大正天皇大藏所
 たりて一かふりありて法華宗より當り當り大正天皇大藏所
 たりて一かふりありて法華宗より當り當り大正天皇大藏所
 たりて一かふりありて法華宗より當り當り大正天皇大藏所
 たりて一かふりありて法華宗より當り當り大正天皇大藏所

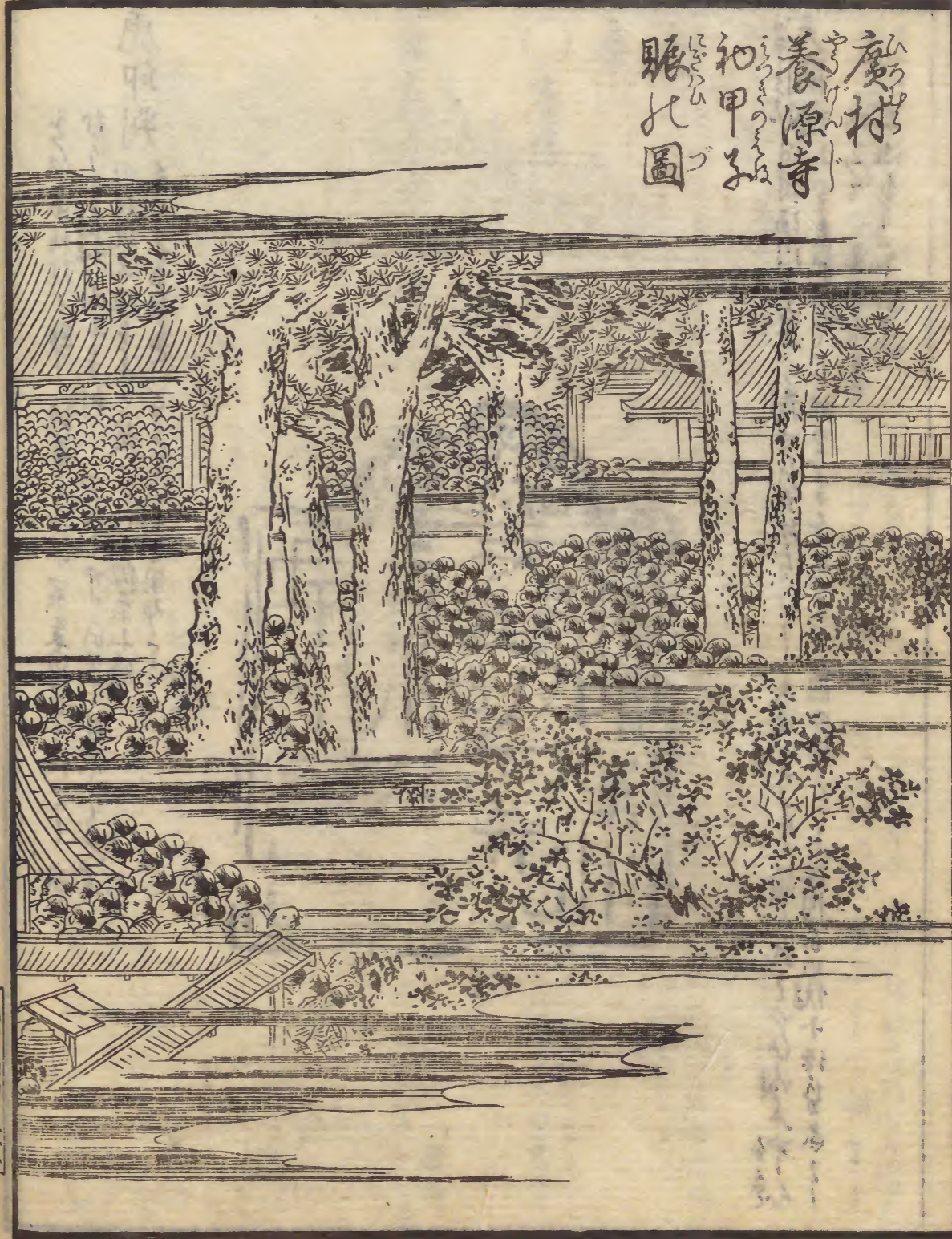
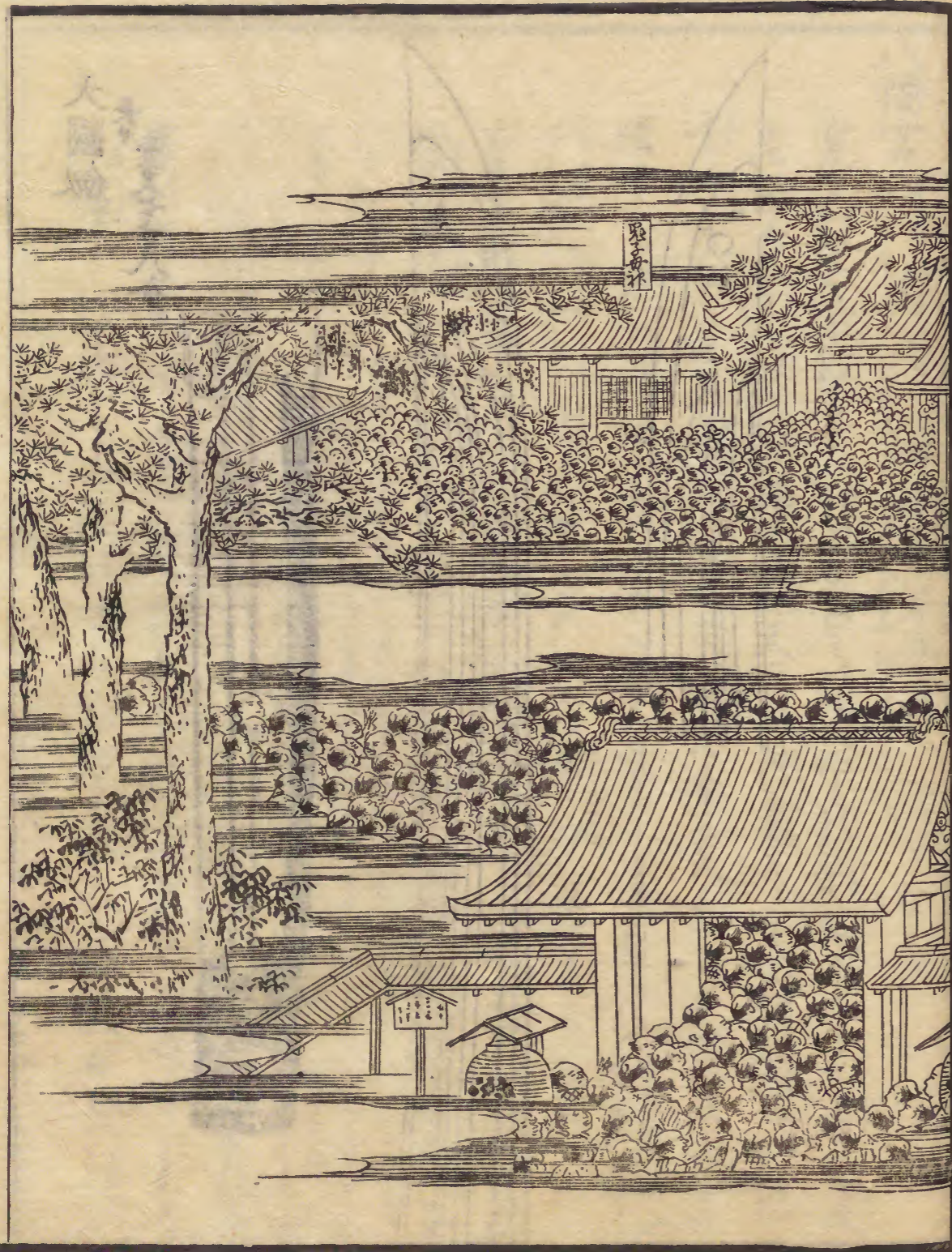
虎印判

を以て結珠小駱一法華寺に於て法華宗より當り當り大正天皇大藏所
 たりて一かふりありて法華宗より當り當り大正天皇大藏所



天國 日向村湯川を去る所一里餘の山中にありて北に古の穴跡と

不位なりや



天國劔
長サ
壹尺七寸八分



八幡宮

中野村小野中七ヶ村の古寺に社あり
寛文八年八月十八日丁丑及田系あり

寛文記小當社々 次郎天宮此御宇に創建小一ヶ古八幡
 屋三分一を以て社領と次又云は神靈々前田村莊中の小鏡
 此世れを龜永の頂以地の古高橋奉養とつゝ者り其
 順せし地を社地とすて社を遷し今相殿の側に見たれとつ
 又云は此の地を今周々前田社を奉山八幡宮とつひ傳ふ又
 云ふ此八幡宮と御清せとつゝ然る奉山小野なるハ
 云ふとつゝ此御清せとつひ地の社々奉山よつて遷し今たれ子
 小野一 寛永二十年癸巳二月造るの棟札に云は時略く此地小遷せり
 元龜文祿等の棟札に云は棟札の文小たれ小天文の如く此地に於るや乃
 沖原あり一々天文の如く湯川氏以地を以て始々御清を奉とつひ
 比永氏を社勢とつひ津守氏を公文とつひ井中氏を文位と
 書此天正十二年癸巳氏御儀の附念小羅子つてみる
 灰燼一社領も亦没収せり今奉養長と奉儀野氏社从



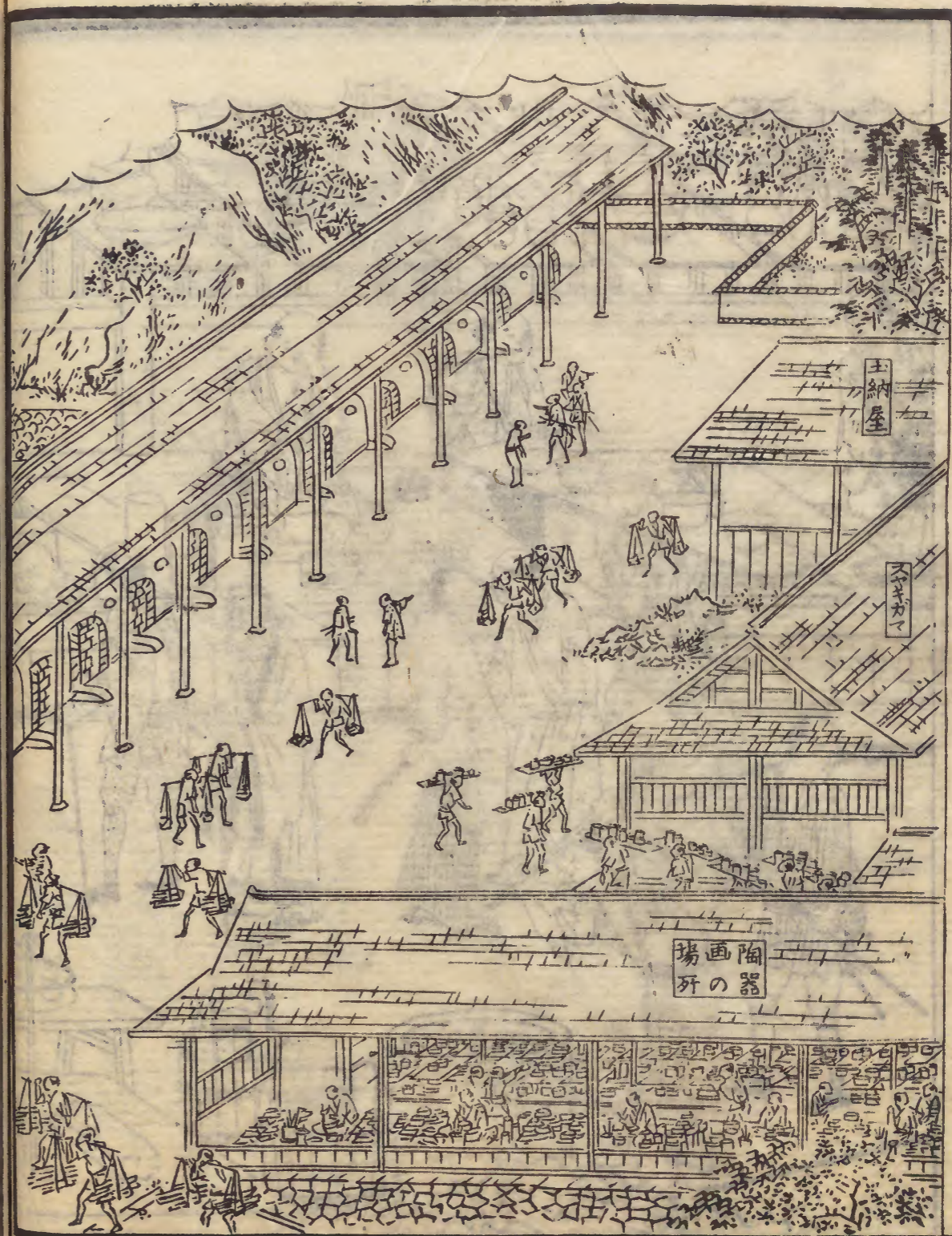
廣八幡宮





男山
陶器
場の
圖

其二



十石を寄せらる元和以豫是小龍用一多し更令燈
籠石燈籠弓波画馬戸帳の乳敷品を志附一多し又津
庫小藏る不古守の紺紙金泥の法華經及大般若經の古書
六百卷河内志末小藤原承德至徳等の年号を書次早
魁の年尚社小初而此彌河河内引尾立神社の書物と
畧似らし以誦を多けくニッバラと云其義を知るもれ
り一今按ずれば小ニッバラと志駈良と云古云と訛る
るべし
本小北前志小字を拍つるを小兒小教ふるを
ニッタラと云ふ是も志駈良の訛るなり 志駈良と史
官記天慶八年七月の條小志多良神の神輿三節と稱す
幣を掛け杖を執ちて秋祭一列志て攝津小字の教
千多人石置あり小志多良神書一其附の秋祭小志多
良と稱す字ふり川家ら命子某志多良と云ふと云り
今も薩摩小平軍神社の祭小氏子等圍繞して云と下

あて拍子をとり川彌河其誦歌小志多良と云ふと云り
河内志多良を合をく其字を考ふる小志多良を即ち
を垂らすとて字を拍つるあり伏志多良一又風俗歌小志
多良と云ふ人の一志多良と云ふ人といはれ小志多良
がぬとて拍られしと云ふ始一志多良と云ふと云り
曰く秋祭ありて此れ意をいふありても志多良乃
誦とて志多良小志多良と云ふを始とす其の始とす
始とす此れ始とす一志多良と云ふを始とす一志多良
始とす一志多良と云ふ一志多良と云ふ一志多良と云ふ
おやの太極と
俗小太極をシタラ勝ありといふ事夕立をすらす
て有故小太極と云ふと云ふ起れる也

男山瀧雲場

廣八幡宮の境内小瀧河内志多良百間南小又十間の地を瀧雲場と
次以地由志多良井岡村の産利多良と云ふ志多良一又故十年十
一月廿八日官許河内志多良志多良を志多良と云ふと云り
一志多良と云ふ志多良の志多良と云ふと云り
志多良と云ふ志多良の志多良と云ふと云り
志多良と云ふ志多良の志多良と云ふと云り

敬白

天満宮

宝前寺

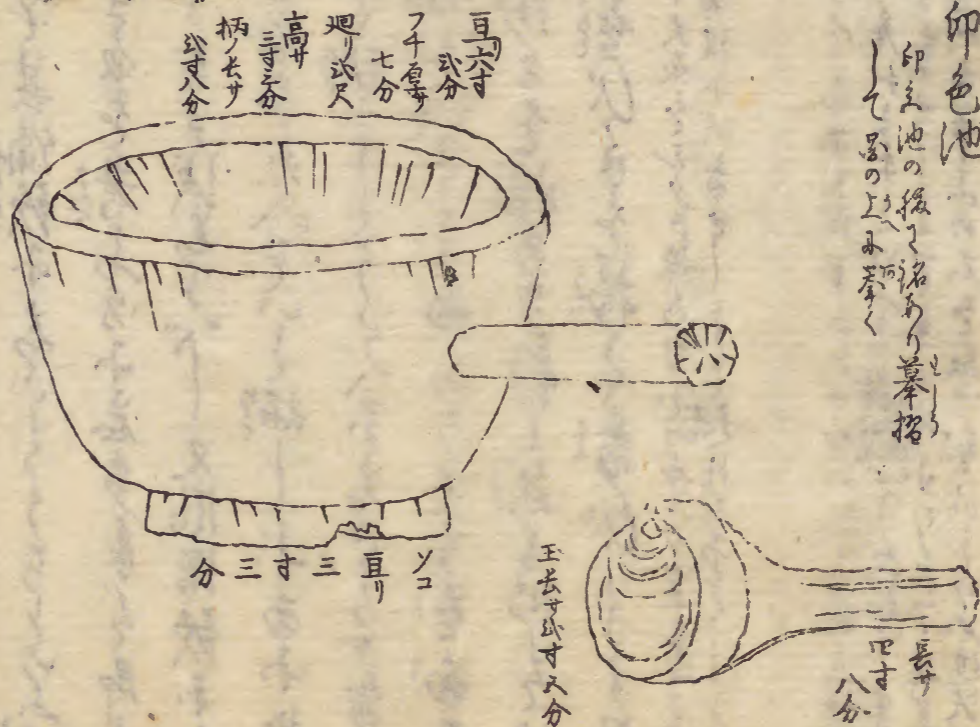
應永十八年

二月一日

敬白

音田山天神社蔵神符印

印は池のほとりあり奉指して是の上小奉く



池蓮山法藏寺

同村小川中流

永享の頃地小津守浄道梅本堂言とつ二人の古高河

了意 了意 了意 了意

開少れを然して當於小集りし二人の古高河地及山林

多平を其り討ことし

附状等河や慶長十二年法皇氏寺領七石を奉せり元

和の儀も終用せり法園中小殿ごこれのもみらとて柵の夫

樹りつと元和の頃 園君内遊覧のまをひひはすま

そよ木蓮のの大風ふ倒れらるしとて

天神社 庭村の乾乙田山とつ小川あり此村の産古林あり又應永十八年未定附

立神 西なるか小浦ふりや小川の神小敷石を奉

なす 印は池のほとりあり奉指して是の上小奉く

なす 印は池のほとりあり奉指して是の上小奉く

貝化石 西廣村裏の山より見ゆ此の化石多く見ゆ

鷹嶋 西廣村の北より二十八町小川に於て中子北浦といふ處あり北風の附く

移以て修小舟

王業集 紀伊國を治してその石と文札の

○廣城趾 紀伊國を治してその石と文札の

應永六年島山基團於此當團を以て名乗於大野城と築
き遊流也後守入乃同氏部を守護代と次其後以城を築
て本城と次 秋中石垣を屋敷城と云ふ此の城名も多し 基團於此
是れ始男尚順入道山崎應永年中より天文年中より以
城を治次天文二年湯川吉光其氣を蒙りてと信じて
南紀の浪士をうきし火をかくト山崎と稱して漢列國奉
浦光の寺小舟と云

○雁頭山能仁寺 名傳村小ありと云ふ寺あり寺傳小云 後村上天皇の御孫

○井關王子社 井關村北の入口小川にあり津波王子

○井關驛 湯波より一里

井關阻雨

數見知豫

離家繞數日便抱決旬情山林秋容老村烟暮色橫

○井關川 井關川二村の

○川瀬王子祠 川瀬村の川瀬小あり神事記の文上小川にあり

○馬留王子祠 日村の村小あり以て馬留王子と稱せり

○津東坂 川原村の津をよぎて東の方津本宮へ城を坂より津本宮へ二村あり
八ヶ岳ふりてうらうらなるをうらうらとて之も列一區を命じこれ

上草薙 中村小坊り巽しつうてんた
同村ありてを治りしつ
藤籠 同村ありてを治りしつ
名といはれ小堂を建たて又乃家も道小修へり

松廬遺稿

紫鐵如飛巖勢橫瀑光觸石濕雲生只看百尺寒冰立中

有奔雷劈岳聲

日暮秋溪聲益雄急湍豚石捲田風板橋與水纏三尺人

過珠跳王碎中

先賀八幡宮 中村より八幡村の先七林有り社お小弘治の中の能わたり八月の
祭礼に係りて四糸踊りて社お小冠袴柳子依の古面あり表し享
保又壬辰八月吉日奉寄進律本宮

岩淵 志剛村小坊りしつ村付本名の英わく人お入十丁許の岩おまをいして人お
をまねてを治りしつ
南朝小孫おれり

觀音堂 日村の西山より流るる水

鹿瀬莊司 鹿瀬庄司といはれ八庄司の一といひけり今今の鹿瀬と申す是庄司の基
祖頼朝が御成敗次第に依りて頼朝も小坊り板本坊といはれ頼朝が御成
敗次第に依りてを治りしつ

○鹿瀬山 上人作の重巖岩峯起の宮一をを治り
十日畧次又攀昇シノセノ山雀鬼嶮岨巖石異昨日

南海集 卷主
宿鹿背山下 昨夜雨蓬沿海煙峰廻路轉上青天江山不許還家夢

松廬遺稿

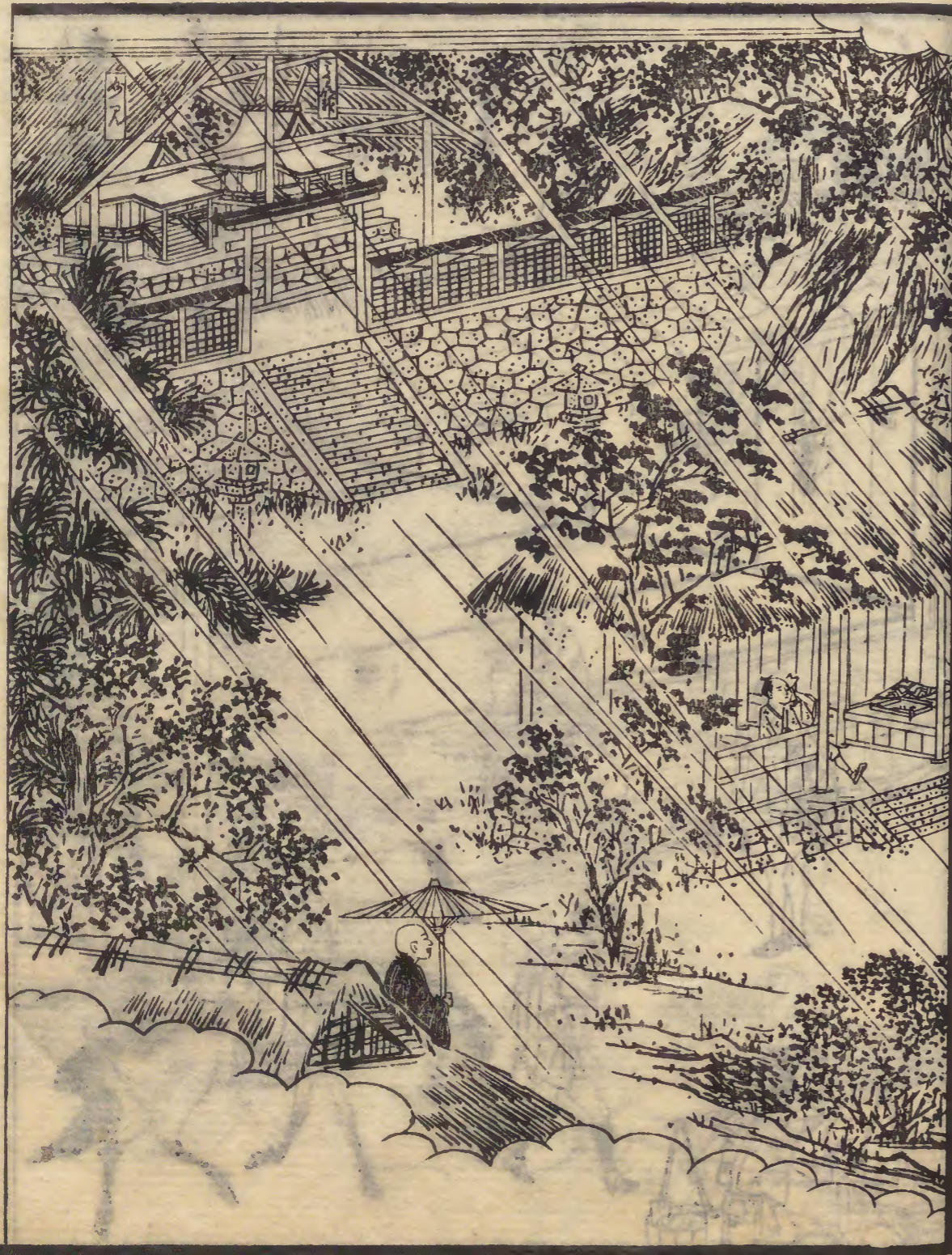
才過波濤又石泉 昨夜雨蓬沿海煙峰廻路轉上青天江山不許還家夢

夢入梅花憶舊遊吟裝更逐冷雲流春風可笑客衣敝

孤劍又過鹿背岡

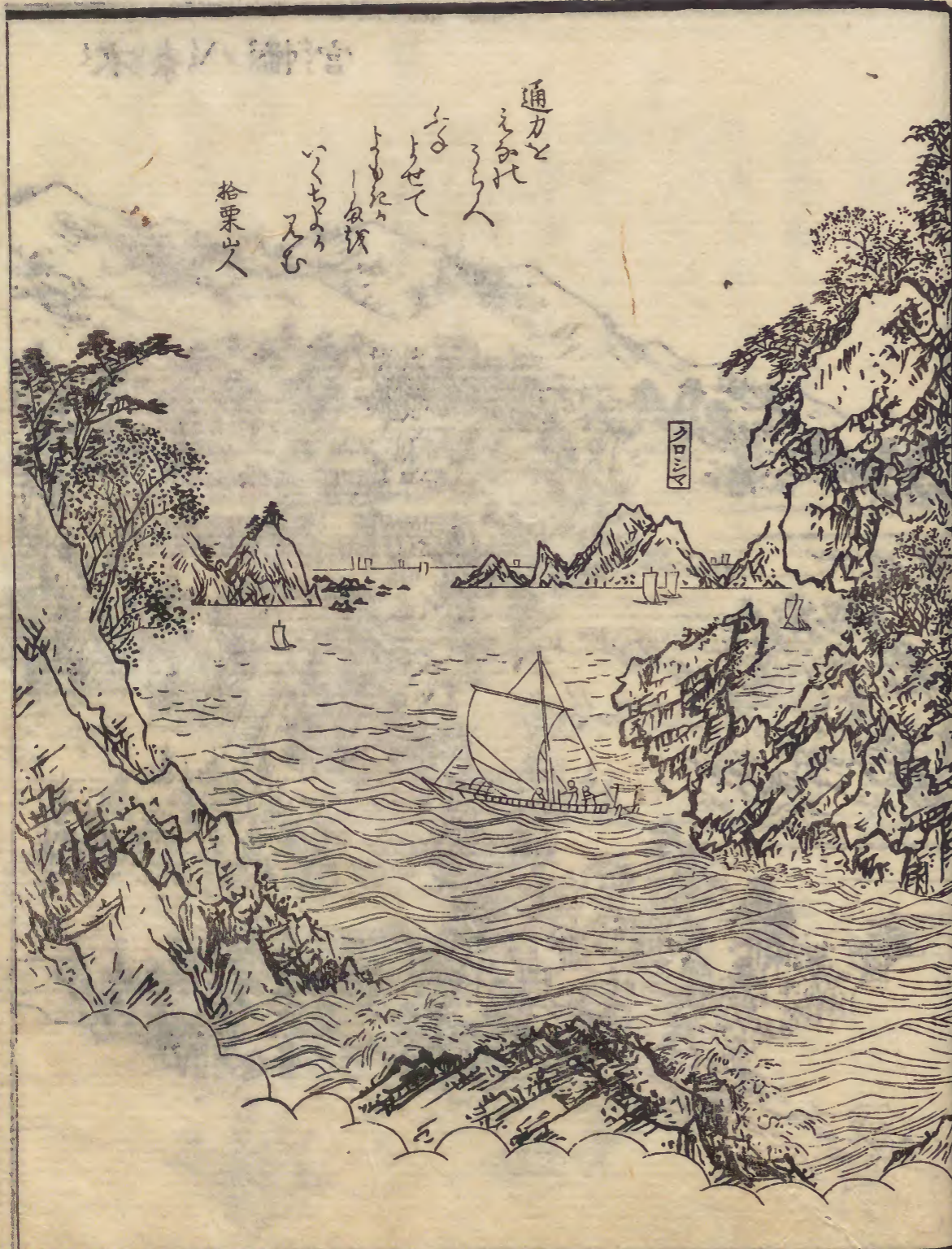
野呂隆訓

祇園源瑜



岩三々明社
淵の輪の神

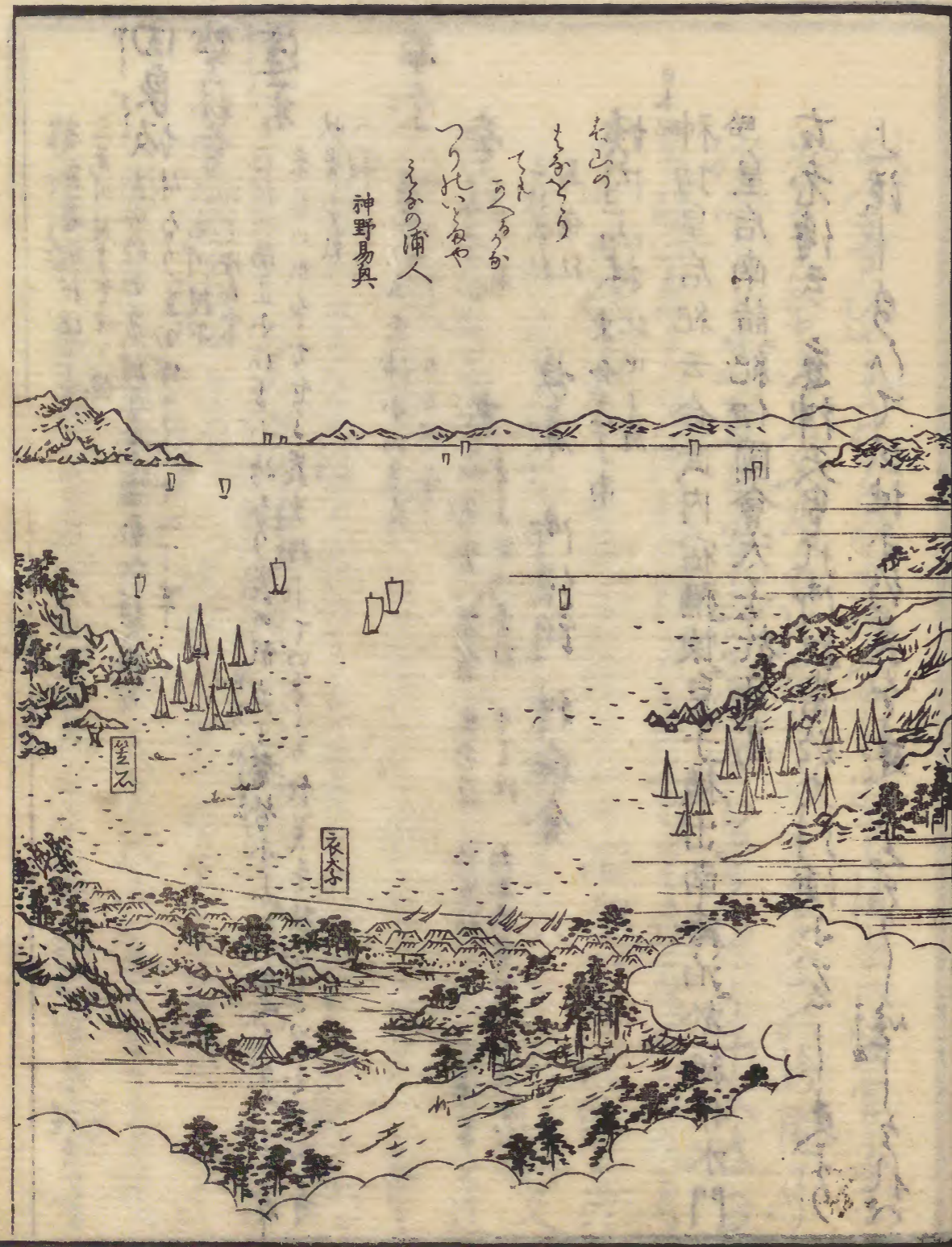




通カト
 えかた
 うらみ人
 せ
 よせて
 よめた
 一むた
 いちよ
 えむ
 拾栗山人



えみうらやうらんづ
 衣奈浦蓬萊の圖



神野易典
 浦人の
 つらねい
 といふ
 といふ
 といふ

衣奈八幡宮



本社
 末社
 法座

末社

三尾川村中ノ四丁條

由良坂 在田原西尾村より高野畑村へ繋る

惣持林寺 三尾川村小

蓬萊 日村の海上小石の小島あり其の形宛小麓皆小山を覆へるが如し一連

状炭すれ

奈奈八幡宮 奈奈浦小石あり

本社 方三間

末社 若宮八幡宮 武内社 恒吉社 天満宮
子安河養社 牛王社 松殿河養社 石清水社

毎代又社

長床 御供所 神輿舎

境内山林 東西三丁南 北四丁條

神功皇后紀云命武内宿禰懷皇子横出南海泊於紀伊水門

略 皇后南詣紀伊國會太子於日高

古老傳云 應神天皇此御紀當於大引浦小恙一丈より

上陸一多ひて此地小石を建て志を以て一丈一尺

上人尊ひて之れを延小神宮を造りて後世八幡宮と云ふ

崇事其後中つゝ又中古此縁記中々奈奈八幡園より

流傳へり多し男山小遷ら勢多し十六日お

貞觀二年三月御赦の程立奈奈八幡と建曆二年九月

廿七日改造せり其礎石の外小一の端石あり此地の縁

らを修む一耐敷せりいり石ありとつゝ今も又

むり大ニ本浦小 今此大引いり 若守といふ名あり 天皇と建

一まつ丹き磐石を布を敷きて 饗宴ありて 奈奈八幡宮

若守小登り其の姓を延ひて子孫を以て此地の下司職と傳

一のやとつゝ 若守此後高今上山と云ふ即高社の下司職なり

ら故に延神と云ふ神子一人 神宮の多し御司り 俸禄 延神を以て此地に命せ

らるる後世延一人を延く 神宮と云ふなり 今畧次

園子といふ八幡大神を 應神天皇此御紀當於大引浦小恙一丈より

其始 後世天皇此御紀當於大引浦小恙一丈より

して大御名を廣幡八幡磨りて神託一ありて
行ひし佛を佛經神國より 皇國に傳來しるは神
心を多しけりい 天宮に懸頼ふらしてかゝる教を傳
へしるはこれ佛の遺教を以て遂に佛の法體の大神と
稱し天平廿年東大寺に法守小知信一 天竺の初
更子と云ふて後より靈驗威力神在大菩薩と稱し
されふりしるは是亦以法華を時子平にて
漫子といふはこれ佛の遺教の要諦を以てされし是より
是も八幡大菩薩と稱し稱しるは然れども上古より
大事りれば申すに依て小知信一と稱しるは
よぐ下武するを言ひるは神ありしるは佛の遺教大
くもるはこれより史典に傳るり申すに源氏物語に神
号と云ふと云て武勇地小知信一と云ふは源氏の士孫小

これ神を信と稱しるは澤小至して天下に貴族一級よき
崇りて今日小至れば小法小守護地取成る意
社小配祀一或は新小社殿を造りて大小の宮社と
す免滞せり當社と正しく 慈仁天皇に祈言ありて
後世知信の社地と云ふは是れも亂世と傳へるは武
尊も廢れと云ふ多うは一 冥小信むと云ふなり

八幡宮縁起二道

也古くは一 神徳の頂は縁起甚速の御命に云く此は神の御用於後と云ふは法見
圓縁のなるは一 志すれども大菩薩の遺教を以て十條御所の源氏小
こゝろにぬらひしるは小法地と云ふは是れも亂世と傳へるは武
尊も廢れと云ふ多うは一 冥小信むと云ふなり
くも小通承慶原の秋前妙光を境和尙御尊小信むと云ふは是れも亂世と傳へるは武
境むれ小通承慶原の秋前妙光を境和尙御尊小信むと云ふは是れも亂世と傳へるは武
子神意小眞合で一の奇蹟にれは一 冥小信むと云ふは是れも亂世と傳へるは武
と云ふは是れも亂世と傳へるは武尊も廢れと云ふ多うは一 冥小信むと云ふなり
何んぞと云ふは是れも亂世と傳へるは武尊も廢れと云ふ多うは一 冥小信むと云ふなり
る一信はこれ小通承慶原の秋前妙光を境和尙御尊小信むと云ふは是れも亂世と傳へるは武
と云ふは是れも亂世と傳へるは武尊も廢れと云ふ多うは一 冥小信むと云ふなり
一めく畫工小傑一 冥小信むと云ふは是れも亂世と傳へるは武尊も廢れと云ふ多うは一 冥小信むと云ふなり
法也と云ふは是れも亂世と傳へるは武尊も廢れと云ふ多うは一 冥小信むと云ふなり

黒島

嶋の東南ふ方

王舎呀にて

一天洞窟を

子(名能小舟

を寄る

其深

大元

三

平

洞

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

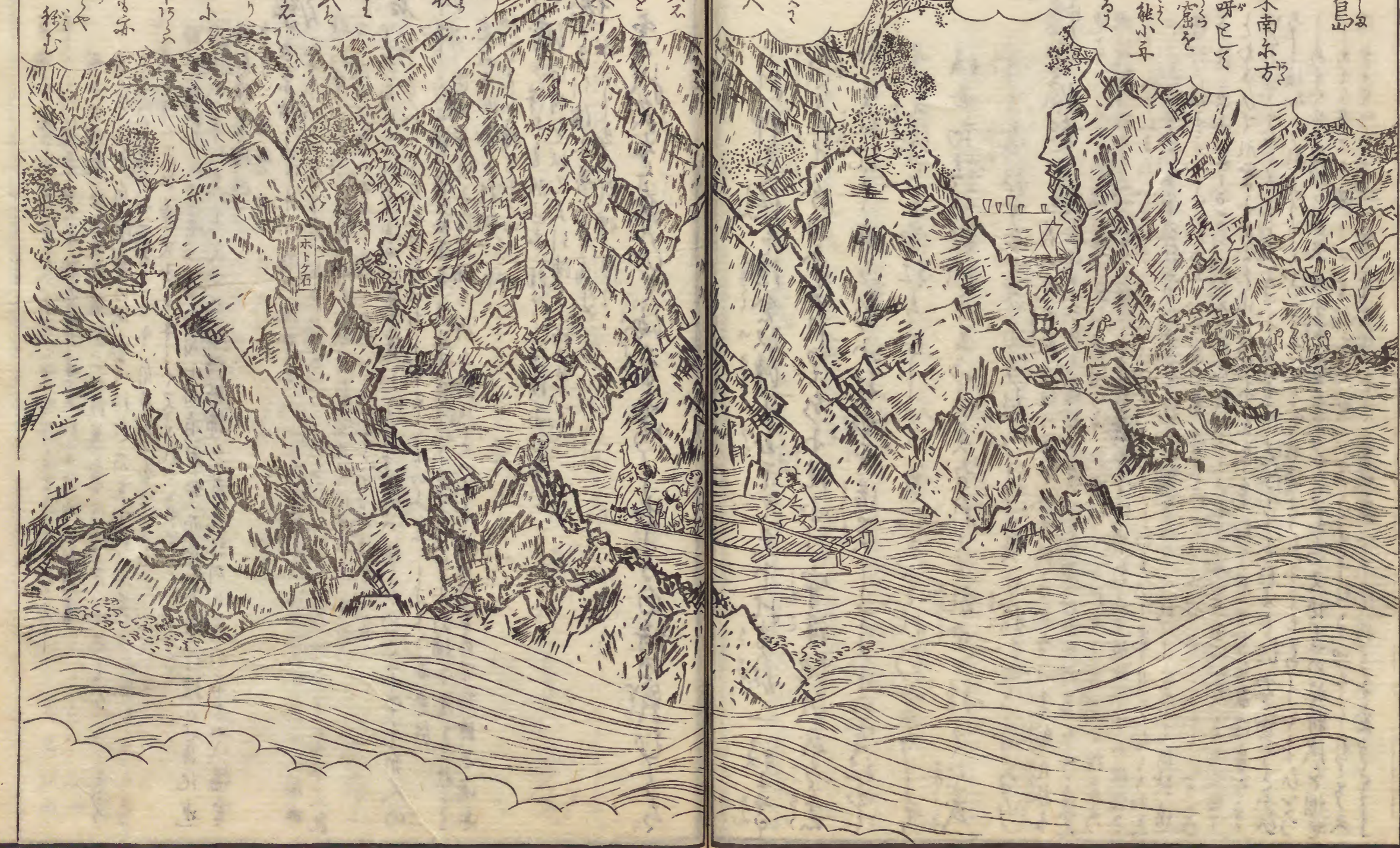
六

六

六

六

六



針の大元
肅然と
立る人
の長
揮
立る状
をなん
老いし
松石
ちんねん
さし味り
今の世よ
米芾の
是をよみ
石大
松

平城をよみんことおそくこふりて管くすちて是とす
をたりぬ于時永九年統集壬午季夏耕雲野納の純拜書

因小云純純と右大臣長親公の法号なり試公本云ゆもをりくあり
ゆへる少や奥國寺の佛室の孫起及立田於重貴公の孫起をもとせ
公の傳ハ大日本史小云年々く又くはくも是等のゆいやく
孫起表紙云云時曆二年七月七日有君命而尋舉國神社之舊祀也
及于新巻故意甚久而朽滅故結補之者也紀別日高秋夜去八幡宮
孫起結表補破
之季一跡每

三丁條の海中にありて是田於乃重貴を射たり周也
傳りてとるるは此傳を結せれるなり久礼久品を射たり

佛石 里傳小云此傳の南面小雲家ありて是田の貴女のこを射たり
色に干洲小に流しして

戸津井 色に干洲小に流しして
色に干洲小に流しして

小引浦 戸津井と破山を隔てて海灣小なり
白埼 大引浦小なりして海上

をれを奪ひて海系小なりしをる白埼の巖むら

二十丈小も何よりとてさく海を岩むら
何れ浪の栲傾ゆふきりひて老ふりた
あまけれそれゆ中ふ息長大后の純神ふせれ
此約の飛をとめりてさくも流るれはつひ傳へさ
浪の子里もさくもさくも大雲のむら人の又さ
つむと勢てさくもさくもさくもさくもさくも
なれりも巖ふむらがれも流るゆゆにれをよび傳はふ
ゆむとこれわさくも流るゆゆにれをよび傳はふ

大寶元年辛丑冬十月太上天皇大行

天皇幸紀伊國時歌
白埼者幸在待大船爾眞抵繁貫又將歸見

松廬遺稿
汎舟游白埼 野呂隆訓

白埼萬葉集既有所其名舊矣在日高西界山足入海
可三四里巨巖競擢立累疊奇態萬狀下有石穴中
敷千席其深叵測時有鈴聲而似巫奏故土人名以巫



とつ井
十九島

とつ井浦の海面は聳然
として宛研山の趣を具
ふ者これを十九島とい
ふ東南地方に接し其
間断相挟して繞る一溝
隔る小似一躍せし踏べ
おんぬるも満潮の時ハ
通船状くこと往来す



白崎



狂哥

釣上れ

魚上り

舟小艇

たのしみ

いふも

あそび

王子黄白



舞洞蓋水石相激而為異響已

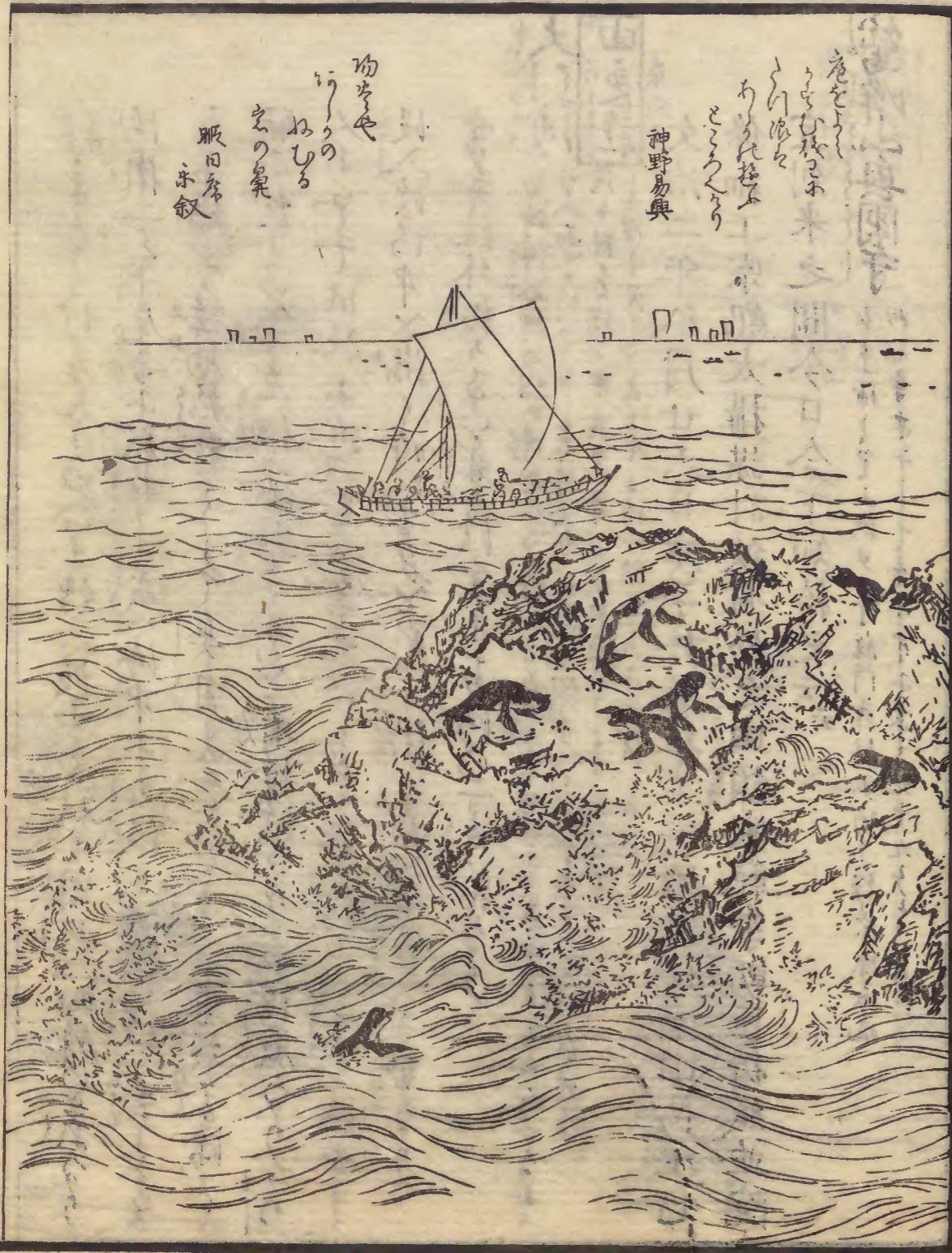
白崎之頂太古霜化為石骨更蒼涼萬崑如筍抽海底累々
層秀瑤芝房神劔鬼剗誰費力造化秘伎洩天藏石門巍然
開雙闕水精劉成仙人狀龍手虎乎呵巖高洞天雲深日月
長人謂此中坐千人清淑氣凝鍾乳香坤靈始鎖高唐女夜
靜每奏神巫舞鈴々金響瓊枝折回波鏜々鼉尾鼓知是鼇
足定四極南維別鎮群真府幽室必有藏碧錄好搜金簡夸
神禹只愧煙火薰此身隻擲凌波遂難臻怒浪簸舟輕於葉
塵蹟豈容攀嶙峋豁然自悟笑拳白更注餘瀝嘲海神自古
誰得東海藥壽張弄舌誑暴秦漢皇望洋嘆未止茂陵風雨
入荆秦雖令餐氣老不死亦是巖穴枯槁人一揖辭汝我可
歸金銀樓臺爾自珍

海瀨

白埼の沖小つらひ傳と白
埼とのるど海流此あり

海瀨と海弁れ歎ありて小つらもれを去さふと尺大なる
もれと一丈二之尺小及び其形を以て小く口尖り齒
牙と太子似たり目大小耳小なりて吻横粒く去り合
身短毛のしある不々を柔福は有り又白多し白粒
又養つ息多しつらと右の扁髻尻にりして末小波つら
尾と歎尾のやくありて小さく尾を挟きて又あぢをとり是
小も尻又つらと末を分けて括のこ
を以てこれを扱て皮を得て馬具等小用肉を魚
毒小柳れ子を細くして他を治多し膝を令癒小傳
て功なりとつらと以歎毎多秋の去用小いつ方よりつら
アとく妻の去用多くは傳小居ると以てつらと鶴と
或らつらと以傳渣地を去るつらとつらとつらと海弁は
物起して竊小扱へらけ患少きを去りて幸くつら小

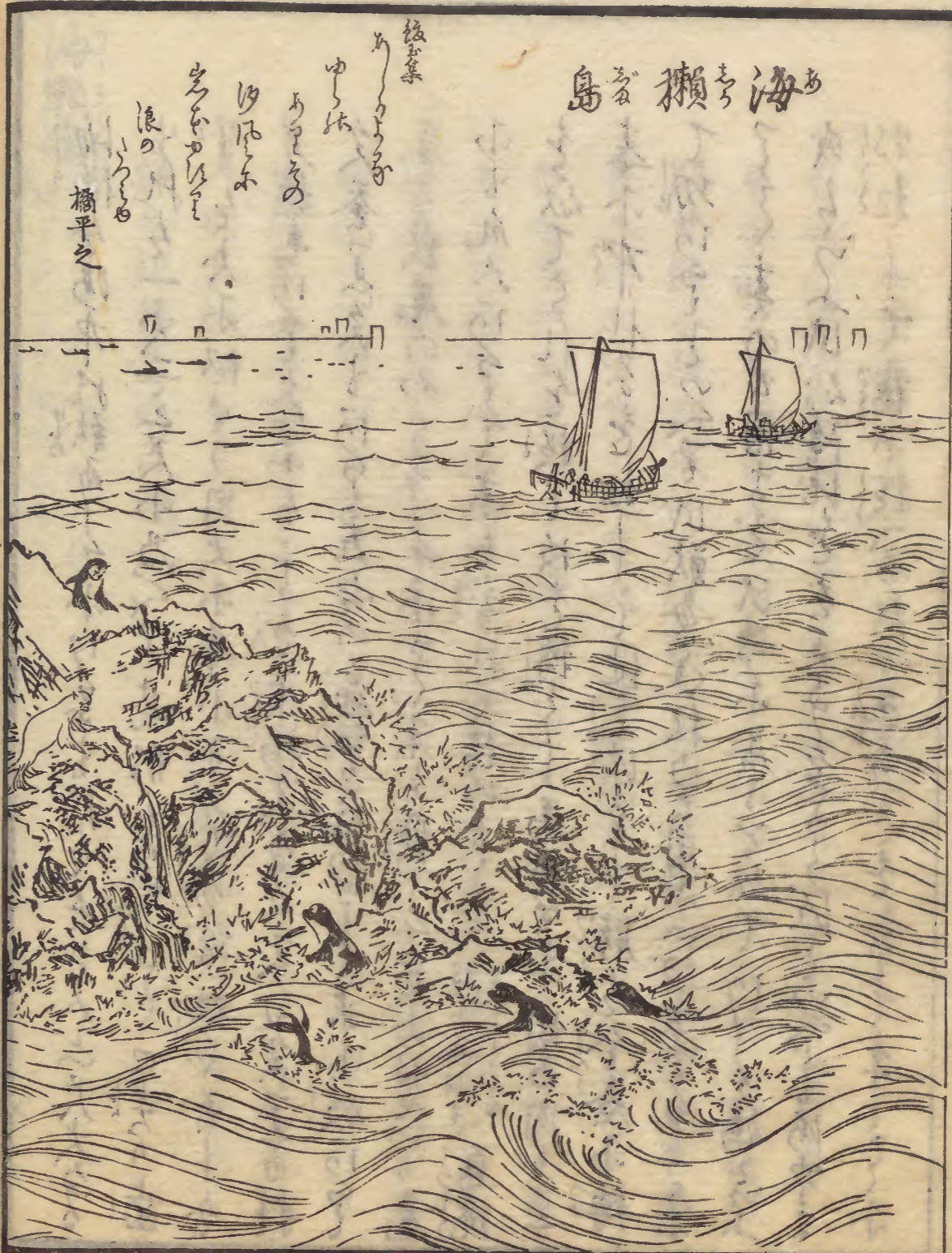
招小桃洞造
鳥流



功を
いづる
おしる
空の象
瓶日
赤叙

神野易興

庵をよ
うむし
いづる
あま
とこ



海
あ
ち
瀬
島

後案

あま

中

あま

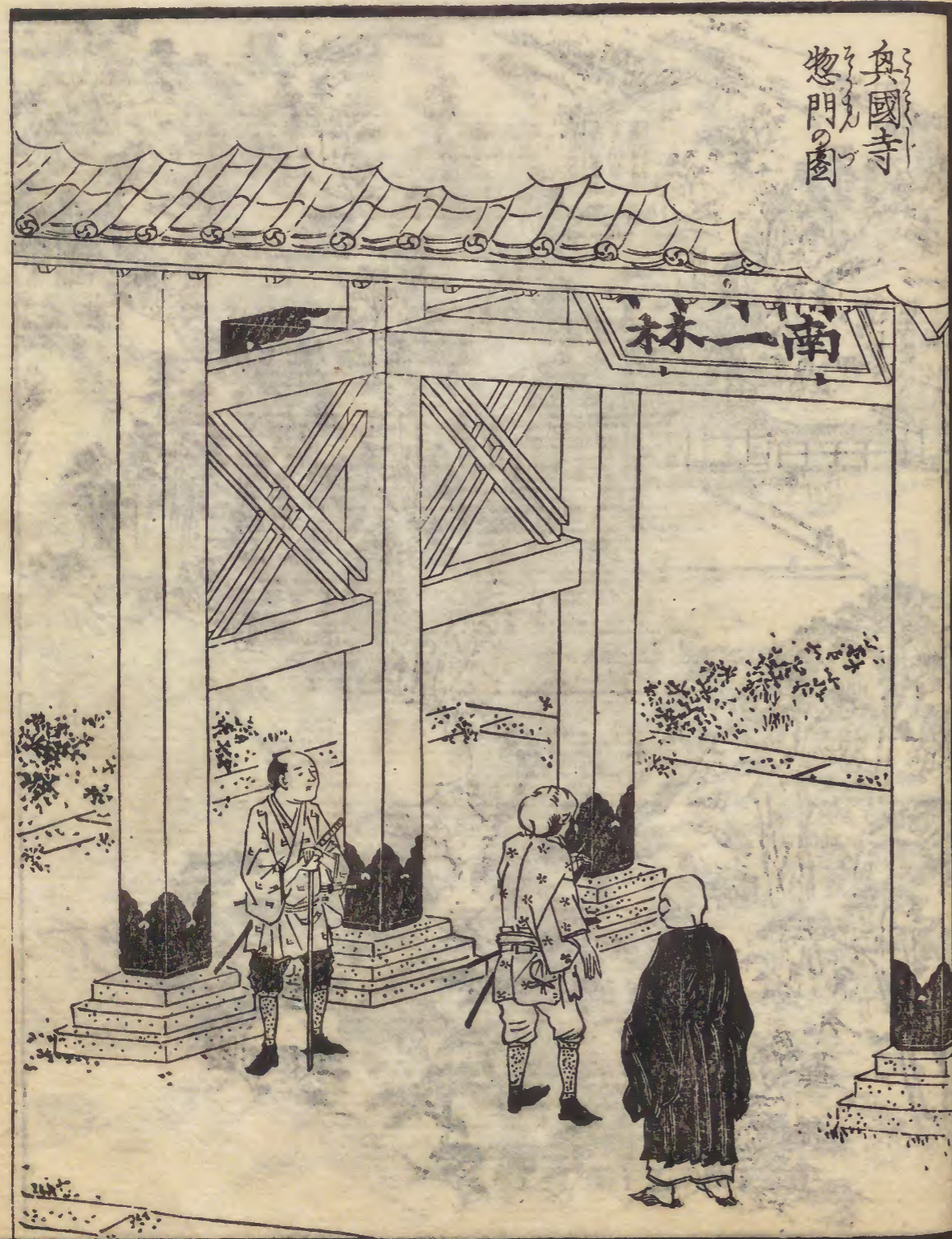
いづる

浪の

あま

橋平之

奥國寺
惣門の園



従来よりわらんとして之の腹小分れて周は二町餘の裏あり
海柳二十尾毎小箱抱し或は海中に出没し魚を捕て食し
お子鳩中種抱振務し奥氣を急むべし者鉄を沸く
眠小枕としも一個の女起る是と看漢次り最漢者なり
人ありては信小近づも魚を仍して元と起し女く海中
没入次海中と潜く時お身と取し遊と死しを畏るを憐る
官命れ外授るすと其次實小南海の一奇物なり

大浦
由良莊

東鑑云

文治二年八月廿六日庚子於蓮華王院領紀伊國由良庄七
條細工宗紀太構謀計致盪妨之由領家範李朝臣折紙並院
宣到来之間今日令下知給之云

鷺崎山奥國寺

衣衣浦より山嶽女四丁條門扉村小り釋宗隆海流
妙心寺末子一にて幸小中末子九十九ヶちり



鷲峰山
興國寺
全圖

漢一の山



山

法王廟

倉

山形堂

天龍院

冷室

山門

書院

法衣堂

庫裏

仰光堂

長谷川

山

尾崎

山

本山

葛山五郎入道木像



法燈國師木像

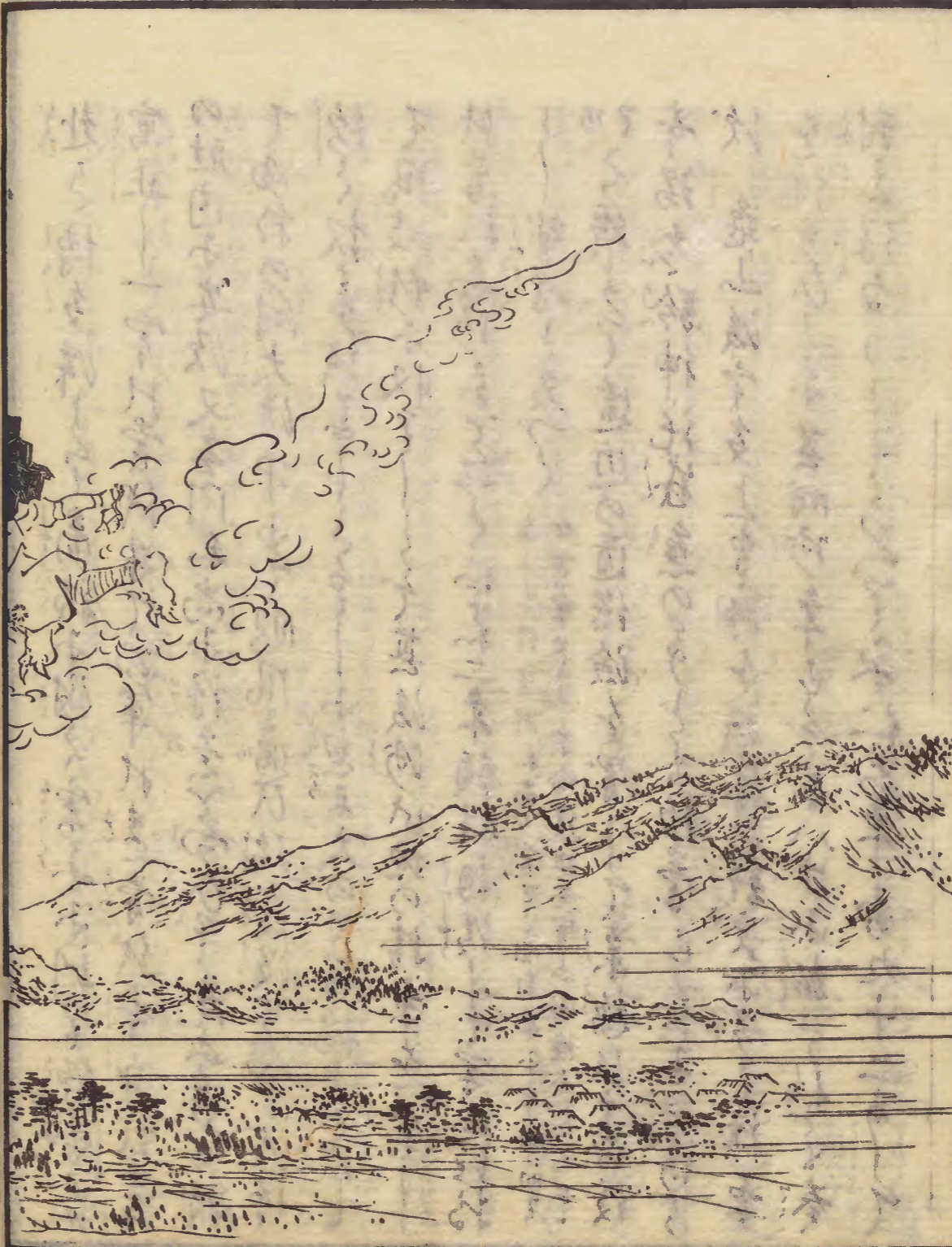


寄洲次願性くわんせいを呼よびて名別の人麻呂あし二郎入いる西入しり過り
ひし西入將軍くわんじ北洲頭くわんじ北骨懐くわんじ小こを死し出しり願性くわんせい
小こ与よ願性くわんせいを感かん謝しゃ志しを當寺たうじ小こ冥めい那なの石塔いしだつを建た
て御ご骨こつを安あん一いつ梅尾うめおの惠めぐみ上人じゆんじん願性くわんせいを西し方かたの寺てら
号ごうと授あづかりて承うけ平へい也や此こゝ道みち元もと釋しやく沙しゃ小こ法ほふひて篆せん文ぶん小こて願性くわんせいと
書かせし心こゝろ折お由ゆ良ら衣え从しゆ家か方かたへ修しゆ的てきの門かど院いん法ほふ多た相さう
御ご代だい友ともの伊い王わう在ざい遠えん能ね入いる西し道みち願性くわんせいと心こゝろ同どう一いつと
以もつ願くわんの地ち若わ干かんと當たうちと去させて法ほふ皇わう北ほく洲しゆ菩ぼ提だい小こと次じ願性くわんせい
並ならびて沙しゃ入い宗そう小沙の附洛其跡林ち未詳沙小春せられ小法二偈を引て
續効れ一曰学道工夫須著力從門入者被人瞞三條椽下容身易
六尺单前参話難退步速觀明歷々運思近竟黑漫々銀山鐵壁雖無路透出透来且自
看其二曰大道本然何費功不通一步卻能通盧設萬物皆無味身靜諸緣尽在空法界
聖凡非念外微塵刹海出胸中人疑個事吾應答の志し乃の多たを去さつて彼
將軍くわんじ北骨くわんじと存ぞん傷やう山さん御ご人にんを法ほふ託たく沙しゃ洲しゆを去さつて
海うみひて室むろ治ち之の三さん月げつ以もつ地ちより和わを去さつて九く別べつ小

赴きり博はく多た津しんより高たか狹は小こ洲しゆと宗そう小こ別べつと終しゆう止し
寓い止し一いつ字じ北ほく堂たう法ほふ建たて將軍くわんじ北骨くわんじ等らう身みん取しゆ言ごん
の肚はら内うち小こ安あん次じ又また玄げん門もん未ま尚なほ小こ孫そん意いと向むかひ尾お小こと願性くわんせい
て海うみの耐たい大だい洋やう中ちゆうあて腮さい風ふう一いつ遇ぐひ殆たひ度た没ぼつせんん以もつ師し
終しゆうく親しん喜き法ほふ意いと一いつと一いつ小こ忽い又また大だいの日にち梅うめ橋はし上かみ小こ況けいじ
て風ふう波は抄しやう小こ収しゆと一いつと一いつ其その後のち沙しゃ以もつ地ちの傍かた京きやうを去さつて
終しゆう寫しやうれ志し乃の多たと一いつと一いつ二に年ねん願性くわんせい相さう結けつ一いつと字じ山さん位い持ぢ
一いつと一いつ終しゆうと一いつと遠えん近きんの道みち倍ばい險けんを冒もう一いつと一いつ系けい趨しゆくひと一いつと一いつ後のち
奇き瑞ずい志し驗けん神しん託たく感かん意いのちと一いつと一いつ枚まい著しやく小こと一いつと一いつ遠えん近きんの
次じ 龜かめ山さん後のち宇う多た上かみ皇わう師しを法ほふ縁えんの託たく交かう小こと一いつと一いつ孫そん要やう
を詢ゆん多たひ一いつと一いつ其その時とき沙しゃ年ねんより一いつと一いつ八十はち小こ報ほうと一いつと一いつ也や
對たい志し強きやうなり一いつと一いつと一いつ永えい仁にん去さ年ねん壽じゆう九く十じゆう二に一いつと一いつ

當山先住強例和尚が著せし因南集小年寺回書
西方寺葛山系倫法祖為年山巡換今名也

法燈寺の使僧二人上州赤木山に
 了て大天狗松の坊に謁し當寺
 再連の約儀をうかめ松を奪ふ
 二堂の山門に扇をて香をを
 とびへりしやうやう年形著
 写集小集一見たり





其二



興國寺に藏ける所の聖徳太子一代圖古画の中抄出



普化岩 ちほれふあり又

國師歸朝の時法普國依理正宗怒といふ居士とほく
うへうへと浩々を崇りてい岩ふありては居士ハ
少習普化宗法派の虚無僧の證揚ふ志を其徒兼相つて
て位やふ天正念火此後法圓小離教して今々普化岩の
名れと抄とす

関南集云開祖自宋歸時有四居士相從參禪之暇皆好吹尺
八管於船中有省值海霧冥濛弄二曲以寄道情遂以霧海路名
其曲到山之後職皆司浴院云浴院旧址稱普化谷蓋居士有於普化明頭
未因錢契投者故名今學其道者亦以普化為祖乃俗弄謂虛無僧是也

因小入虚澤傳記小入陳宗此獲小寺といはし時普化禪
昨十と其此孫張泰小虚澤ハの一也と授く歸朝の後中子
寄牛小傳又小依理正法普宗怒の居士といはるる子
後寄牛仍師の志といは地を去るる後のか毎ふいさ
後一々世人小知らるる一とといふ宗怒くといふ今宗つ
本も教十寺といふ新冷法括慈派寄牛派小葉派小也

開山堂聯

語要傳聲 字波離 軌範

行須緩步 習馬勝之威儀

此末寺小志其寺法嗣ぐまれ其也と小末の志を
授戒とくるとい由孫ふよれるなり 抄入虚無僧の字知進
詞小蓋僧の二味紙とぬ者小く市面桶後小は多矣法のつ戸小くつて天
ハうく外あり列の業ありとれいやうといひ七十一番藏人志亦合字小
も亦舊傳なり

一山聯額教多と小堪さハ儀小其二を九小掲ぐ

大 門 額

天界山住來泐書

關南
第一
禪林

中 門 額

竹友年七歲書

鷲峰山

開 山 堂 上 階

自 若
夾山

全 下 階

洗 雲
石龍橋洲

全 無 門 和 尚

綿 枝
葉 茂
無 窮
古線唐汝一山一寧

佛殿聯

鷲峯法苑照曜
象丈之先
燄

龜山雪竹深友
揮千秋之
德輝

古梁

禪堂前門

海會

幸魯盛典總裁官太子
少師
黎封衍聖公孔毓圻

呼 赫 亭

呼赫一亭築在飛事
尚圍翠瓦沐松古鏡
境殆塵荒淨寂成之
掛鈎鐘鐘自隨
致招終世表幽堂不
然以一絕
逐恰以理之泥石年
呼赫亭自土新崖台
尺松

嘉子題

南紀風雅集

過興國寺并法燈國師像

僧法霖

師去知何處高名今已傳
斲碑橫草際靈塔倚松巔
山學

維摩默雲參伽葉
禪登臨時極目空
盡東三千

關南集

法燈國師贊

僧默洲

昏衢法燈迷津寶筏威風
凜似滿地秋霜光明赫如
麗天

日月起西海兮入無門
閑歸東土兮開春閣
岨住山當卓

錫杖妖魅頓潛說法感
雨寶珠迅雷忽發敢讚
一辭罪當

僭越夫是之謂三朝一國
之師表五祖七世之的骨
吁盛

矣哉

將軍記云

明德三年二月山名修理亮
發理力と失ハ一族部
地六十人

給小宗アツク由長此
湊小ハガク奥國
此公智上人マテ

出家して皆ちりく
小長くりマ

家集

奥ノコトヲマテ
何ノ時トス

勢ハ家集ノ
昔ノ時ノ事ハ
今ノ事ハ

源令綱

四

何ノ事ハ
今ノ事ハ
源令綱

全

修善寺奥國寺の東

七丁許あり

法燈小沙牟法燈小沙牟文形二年沙六十景此時神純小上

て法別小沙牟母堂法燈小沙牟法燈小沙牟法燈小沙牟法燈小沙牟

尚寺に尚寺に尚寺に尚寺に尚寺に尚寺に尚寺に尚寺に

東南の境界此地小築く

元天神社中村小

白山権現社同村の北

東泉寺同村あり

霜薄南中紅葉稀獨憐楓樹映禪扉霞標近接天台色

僧默洲

雲錦新成織女機且訝枝々燈火點又看片々雨花飛

人間縦有停車賞爭似開窓對落暉

妙見宮加村あり

長谷寺同村あり

傳云法燈小沙牟法燈小沙牟法燈小沙牟法燈小沙牟法燈小沙牟法燈小沙牟

地小あまの運を大木小長谷親喜同航の依を幸そとて長谷寺と
山号珠石山といふを珠の幸の西珠記小沙牟ありと云ふ
紀國造飯文の珠記小沙牟四年三月十九日午の時小沙牟奥本小沙牟
を幸そとて法燈小沙牟を幸そとて法燈小沙牟を幸そとて法燈小沙牟
の幸そとて法燈小沙牟を幸そとて法燈小沙牟を幸そとて法燈小沙牟
て室中を又凡ば希き光ありてや形勢大室の如く小沙牟を幸そとて
ぬま及び移くの幸そとて法燈小沙牟を幸そとて法燈小沙牟を幸そとて
うやくやくと云ふとて法燈小沙牟を幸そとて法燈小沙牟を幸そとて
ゆり或は飛鳥の如く小沙牟を幸そとて法燈小沙牟を幸そとて法燈小沙牟
かの殿を揉る者小沙牟を幸そとて法燈小沙牟を幸そとて法燈小沙牟
をも揉んとて法燈小沙牟を幸そとて法燈小沙牟を幸そとて法燈小沙牟
凡ば形相固ありて小沙牟を幸そとて法燈小沙牟を幸そとて法燈小沙牟
の如く小沙牟を幸そとて法燈小沙牟を幸そとて法燈小沙牟を幸そとて
法燈小沙牟を幸そとて法燈小沙牟を幸そとて法燈小沙牟を幸そとて
て法燈小沙牟を幸そとて法燈小沙牟を幸そとて法燈小沙牟を幸そとて

同袍秋日叩禪扉寂寞林丘人事稀習靜原知塵外是

論心寧比世中非遠蒼雜樹鳴蟬乱出岫孤雲倦鳥歸

更有瓦爐鴻漸趣茶烟片々逐風飛

御敬誦

細代村ありて元本此頃建させり
といふ今も法小沙牟あり

長谷寺

鈴屋集

山にゆき

あそびたかや

たえぞい

かひ乃きり

まのゆき

本居宜長

田良坂



長谷

瓊珠峯



由良湊の圖

内東島野首
さきの
あわい
さし
ゆり
さし

夕暮入田を
ふりふりゆり
浦はくれやく
ゆりのまつり

家衛

康光



島嶽山首
紀のふや

ゆりのまつり
ゆりのまつり

ゆりのまつり
ゆりのまつり

ゆりのまつり
ゆりのまつり

玉葉其私
ゆりのまつり

ゆりのまつり
ゆりのまつり

ゆりのまつり
ゆりのまつり

平政村能長



や一傍れ系念の存中ら紀宿とこそ浪のつらさの
 ぐさめふと神宮に押し漁火の燈は河舟が前集
 尾葉をさるる小虫とてあもさるる一室を系念神
 宮に中間よりと雲井ふとる大山とて頂へ一しつ乃
 あり志成りて今清人の改めぬとて山奥園寺
 縁起ふさしと書一又湯山とて鳴らざらふとる尾上
 よりこれ眺むとて中とてわらうとるさるる一賑傳のをら
 ありとてわらうとる波とてわらうとる大船の出入絶るるもら
 ありとてわらうとるの志とてわらうとる浪ふるるるら要の
 小の系念思ひぬられとてさるるれ白ひとてさるる
 さも河にわかれと浦一とて系念松葉門のじとてさ
 るれとてさるるとてさるるとてさるるとてさるる
 万葉集 イモガタ 蜀歌作 タマ
 為妹玉乎拾跡木國之湯等乃三埜二此日鞍四通

同

大宝元年辛丑冬十月 太上天皇大行天皇幸紀伊國時歌
 アサヒキキキイデ、ワレハユラサキツリルアヘラ
 朝開擲出而我者湯羅前釣為海人乎見變將來
 今一首流小白律歌の原とあり

新古今集 紀ふやゆら波小拾てふらとてさるるら
 推中納言長方
 続後撰集 玉拾ふ由は波小思ひれ光とてよらとてさるる
 平重時朝臣
 続古今集 かのふ由良の押の月流とてさるるら源
 源師光
 玉葉集 されふ由は波小思ひて月の出の雲松あり
 前内大臣通
 新古今集 紀ふやゆら波の朝朗とてさるるら
 後小松院
 夫木抄 されふやゆら浦風とてさるるら
 室嘉門院四條
 内裏名所百首 紀の海の由は波小思ひる波とてさるるら
 民部卿為家
 順徳院
 紫禁和哥集 浪とてさるる波とて紀ふやゆら波の押とてさるる人
 兵衛内侍
 順徳院
 金槐集 打とて秋とてさるるら紀ふやゆら波の筆とてさるる
 鎌倉右大臣

沖つ風浪吹きて記のふや由良はたつらぬ夕言のま

関白

日

松舟こく由良は神の波風ふきとふらぬ夕言のま

左衛門尉長親

家集

由良は舟を漕出てこれら浪のみ飯をふきとふらぬ

慶運法師

日

中これや漢漕出られば舟をふきとふらぬ

宗祇法師

河内浦

村中浦浪迎ふ別荘の松ら

家集

玉拾ふ由良は漢の舟もふきとふらぬ

源朝臣令綱

日

浦舟由良は漢の浪枕もふきとふらぬ

日

風そよぶれば漢舟もふきとふらぬ

日

明ぬくれば漢舟もふきとふらぬ

日

中これや漢漕出られば舟をふきとふらぬ

日

浦舟由良は漢の浪枕もふきとふらぬ

日

風そよぶれば漢舟もふきとふらぬ

日

明ぬくれば漢舟もふきとふらぬ

紀伊名所圖會後編卷之四終



